



名大トピックス

No.118 平成15年3月31日発行 名古屋大学総務部企画広報室 編集 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 Te(052)789-2016
ホームページ URL <http://www.nagoya-u.ac.jp>

平成15年度入学試験が実施される



特集

平成14年度 定年退官教授のことば(7～32頁)

CONTENTS

第15回タンデトロン加速器質量分析計シンポジウムを開催.....	2	名古屋大学語学研修を終了.....	6
博物館が第21回特別講演会を開催.....	3	特集 平成14年度定年退官教授のことば.....	7
ベンチャーセミナー by 名古屋大学を開催.....	4	本学関係の新聞記事掲載一覧(15年2月分).....	33
農学国際教育協力研究センターが2002年度第10回 オープンセミナーを開催.....	5		



年代測定総合研究センターが 第15回タンデトロン加速器質量分析計シンポジウムを開催

年代測定総合研究センターは、1月30日、31日、シンポジウムにおいて「名古屋大学タンデトロン加速器質量分析計シンポジウム」を開催しました。タンデトロン加速器質量分析計による研究成果を報告するこのシンポジウムは、毎年1回開催されており、15回目となる今回は、研究者や学生その他、一般からの参加者も含めた89名の出席者を前に、4件の特別講演と12件の一般講演、2件のポスター発表が行われました。

1日目は、中村俊夫 同センター教授のあいさつとタンデトロンの諸性能と現状に関する講演があり、次いで、曾我貴行 高知県立埋蔵文化財センター主任調査員から、「南四国における縄文から弥生時代の遺跡である高知県居徳遺跡」について、森 勇一 愛知県立明和高等学校教諭から、「昆虫化石を用いた古環境復元」

について、それぞれ特別講演が行われました。続いて古川総合研究資料館1階のタンデトロン加速器質量分析計2号機を見学した後、タンデトロン加速器質量分析計による炭素14年代測定法を歴史学・地球科学の分野に応用した研究についての講演を中心に、9件の一般講演が行われました。

2日目は、木村勝彦 福島大学教育学部助教授から、年輪年代学研究の新しい展開について、また、村上恭通 愛媛大学法文学部助教授から、東アジアにおける鉄技術の流れについて特別講演が行われ、その後、タンデトロン加速器質量分析計による鉄製遺物の炭素14年代測定に関する2件の一般講演と活発な討論が行われました。



シンポジウムでの討論の様子



タンデトロン加速器質量分析計見学会の風景



博物館が第21回特別講演会を開催

博物館では、2月6日、博物館講義室において第21回特別講演会を開催しました。講演は森 啓 東北大学名誉教授（前東北大学総合学術博物館長）が、「わが国における自然史教育・研究の課題」というタイトルで行い、40人ほどの参加者が熱のこもった話に聞き入りました。

森氏は、古生物学を専門とされ、特にシルル紀の珊瑚の化石においては世界的な研究成果を修めておられます。今回の講演では、スウェーデンのゴトランド島での研究活動の様子を紹介するとともに、スウェーデ

ン等のヨーロッパ諸国の自然史（Natural History）研究に対する理解と日本との相違について、文化やライフスタイルの違いも交えて分かりやすく解説しました。そして、「21世紀は自然史の時代」という言葉を用いて、これからの自然史研究の重要性とそのための知識の継承の必要性を強調されました。講演後には、これからの自然史教育・研究についての活発な質疑応答があり、参加者からは、「非常に共感できる」等々の多くの感想が寄せられ、充実した講演会となりました。





先端技術共同研究センターが 2002年度ベンチャーセミナー by 名古屋大学を開催

先端技術共同研究センターは、2月20日、名古屋駅前のトライデントコンピュータ専門学校において「2002年度ベンチャーセミナー by 名古屋大学」を開催し、学生、金融関係、中小企業経営者、大手企業管理職など90名が参加しました。

このセミナーは、同センターと南山大学経営学部が共同で開催しているもので、年に2回、本学と南山大学がそれぞれ担当し、今回で通算4回目となります。今回は「サービスの原点を考える」と題し、高田坦史 トヨタ自動車取締役、黒田武志 イーブックオフ社長、本学法学部3年生の高嶋舞、三善英夫 UFJモーゲージサービス不動産調査部次長、藤井達敬 南山大学前経

営学部長、同センターからは枝川明敬教授が参加し、平野眞一センター長のあいさつがあった後、高田取締役の基調講演、参加者によるパネルディスカッションを行いました。高田取締役からは、トヨタ自動車の市場での強みについて、現在の単なる延長で商品開発を進めるのではなく、いわばフューチャープル(Future-pull)といった考えの下で市場開拓を行うというトヨタ自動車のコンセプトについて、わかりやすく解説されました。

また、フロアーからの質問も多く、東海地区での起業、創業について、講演者からの貴重な助言やパネリストとの討論が活発に行われました。



基調講演を行う高田取締役



パネルディスカッション



農学国際教育協力研究センターが 2002年度第10回オープンセミナーを開催

農学国際教育協力研究センターは、2月26日、同センター客員教授の三好皓一氏を講師として、第10回オープンセミナーを開催しました。

三好氏は、国際協力事業団（JICA）のアメリカ合衆国事務所長や企画部評価次長、評価管理室長等を経て、現在国際協力専門員の職にあり、主にJICAの政策・戦略、プロジェクトやプログラムの形成のほか、評価に携われ、2002年度日本評価学会論文賞を受賞、同センターでは「農学領域のプロジェクト評価の理論と方法の確立」を研究されています。講演は「評価の枠組み - より実践的な評価を目指して - 」と題して、今日の成果を取り巻く環境の変化、特に国際協力では、

開発目標が設定され、その達成、成果を重視するようになってきていること、このような傾向は、国際協力のアプローチにも変化をもたらし、成果重視の計画策定とともに成果の達成と計画の適切性を判断するために、各援助機関や開発途上国の行政機関は、評価への取り組みに努めていること、また、このような傾向は、国内での地方自治体の行政評価や中央省庁の「評価法」に基づく政策評価などにも通じることなどが話され、評価の手法についても専門的な説明が行われました。その後、他大学の教官も交えて1時間以上も熱心な討論が続きました。





名古屋大学語学研修を終了

昨年4月11日から実施していた「名古屋大学語学研修（英語中級）」の全ての日程が、2月6日をもって終了しました。

この研修は、本学の国際交流・留学生担当・今後英語能力を必要とする職員に対して、英語応用能力の増進を図り国際化に対応した職員を養成することを目的として、言語文化部が開講している「特別研修コース（全学向け授業）（英語中級）」に学生と一緒に参加する形態で実施しているものです。研修には、全学から7名の研修生が参加し、講師として、前期は haig, Edward tobias whitton、後期は Fiona May Webster の外国人教師にお願いしました。

前期授業は、即興劇を行って英語に慣れ親しみ、後期授業では、英語で世界的問題を考えディスカッションを行う等、学生と共に刺激を与え合いながら勉強し、会話能力を高めました。

また、2月5日及び6日の2日間には、特別補講と

して実務に役立つ英会話を行った後、渡辺 言語文化部助教授を交え、研修生一人一人から、研修に対する感想・感謝の気持ち・今後も勉強を続けていきたい等のスピーチが行われました。

留学生・海外からの研究者が増加している現在、益々英語の必要性が大きくなってきており、今後の職務・国際交流に役立つことが期待されます。

修了者

総務部人事課職員掛主任

総務部人事課第一給与掛

学務部留学生課留学生企画掛

経済学部・経済学研究科教務学生掛

情報文化学部・人間情報学研究科教務学生掛主任

国際開発研究科事務掛

環境学研究科・地球水循環研究センター庶務掛

上野山多恵

梅田 瑞絵

丹下 陽子

大屋友美子

菅谷 淳子

棚橋 是之

岡田佳代子



平成14年度 定年退官教授のことば

定年を迎えられ、この3月31日をもって退官される次の教授から、本学を去るにあたってのことばを頂きましたので、掲載します。

加藤純章	(文学研究科)
榊達雄	(教育発達科学研究科)
田畑治	(教育発達科学研究科)
小木曾基弌	(情報文化学部)
熊野聰	(情報文化学部)
黒田義浩	(理学研究科)
郷通子	(理学研究科)
太田龍朗	(医学系研究科)
久場健司	(医学系研究科)
中島伸夫	(医学系研究科)
稲垣康善	(工学研究科)
小早川久	(工学研究科)
鳥脇純一郎	(工学研究科)
西淳二	(工学研究科)
松崎雄嗣	(工学研究科)
宮崎哲郎	(工学研究科)
森田健治	(工学研究科)
武居幸子	(生命農学研究科)
塚越規弘	(生命農学研究科)
牧野志雄	(生命農学研究科)
田中浩	(環境学研究科)
松井徹哉	(環境学研究科)
湯田利典	(太陽地球環境研究所)
小川晃男	(生物分子応答研究センター)
堀川直顯	(理工科学総合研究センター)

世親の吐息

加藤 純章



平成5年4月から平成15年3月まで、ちょうど10年間、名大文学部(文学研究科)にお世話になった。東京の小さな大学で一般教養を教えていた私が、名大という名門国立大学のインド哲学史料(インド文化学科)に赴任することができたのだから、大いに喜び大いに張切った。毎晩徹夜をして演習に臨んだが、そのわりに授業は盛り上がりなかった。いま考えてみると、学生たちに馬鹿にされてはいけないとばかり、残りなく準備をして、上から教え込もうとする姿勢が嫌われたのだろう。

学生諸君と一緒に、授業の中で考えていこうと思いはじめたときには、もう5年もたっていたらどうか。そのころから肩の力が抜け、皆とも打ちとけて、授業中の彼らの発言も増え、私自身予習も授業も楽しくなってきた。真理の前では教師も学生も同じ立場で、謙虚に進むべきだという極く当り前のことが、やっとわかってきたように思う。名大定年の後は、関東の小さな大学で比較文化を担当することになっているが、名大の経験をふまえて、よりよい授業ができるのではないかと、いまから楽しみにしている。

学生諸君と飛騨の古川や、知多の日間賀島へ旅したのも、楽しい思い出である。降るような星の下で、防波堤の上に寝ころびながらワインを飲んで語り合ったことなどが忘れられない。彼らには授業ばかりでなく日常のつき合いでも、いろいろ教えられることが多かった。教えるつもりで来たのが、沢山のことを教えられて、いま名古屋を去るのである。

私は長い間、A.D.4,5世紀のインドの大学者ヴァスバンドゥ(世親)の名著『アビダルマコーシャ』(『俱舍論』)を勉強してきた。この書にはそれまでの保守的仏教の体系が巧みにまとめられているばかりでなく、世親個人によって改革された新しい合理的な仏教思想が示されている。後代の仏教論書はほとんどこの『俱舍論』に影響され、それは

日本仏教にまで及んでいる。しかも彼の新学説はいずれも、創始者釈迦の基本的思想を破壊するものばかりのように思われる。そして彼がその新学説を記すときには、決まって自己の姿を隠くそうとしていることも、わかってきた。従来保守的仏教への遠慮もあつたらうし、当時すでにインド固有のヒンドゥー教に押され気味の仏教を、立て直すための苦悩もあつたのだろう。

私はよく学生諸君に、「世親の吐息を肌感じて、ゾクッとすよ」などといってきたが、むろんそこまで深く理解できたというはおこがましいことである。しかし近代仏教学がヨーロッパに生れて100年あまりたった現在、多くの研究の蓄積のおかげで、1500年もの長い間だれもが気のつかなかった世親の隠れ蓑がはがされ、彼の吐息が感じられ、彼の苦悩も心のヒダヒダも、やっとわかる時代がやってきたのである。そうなればインド仏教の思想史も新しく書き直され、日本仏教全体の本質もよりはっきり見えてくるはずだし、仏教研究が現代的意義を十分に荷うことができるのである。随分気の長い話だが、人文科学の分野ではこんな例はいくらでもあることだろう。

今日の大学改革では、現代社会と直接かかわりのある、役に立つ学問が志向されている。これには私も大賛成である。インド学や仏教研究もこれに十分貢献できると思う。しかしそれと同時に、この大学にもう少しゆとりのある雰囲気してほしい。結局は各研究者の自覚の問題に帰するとは思いますが、息の長い、地道な研究を尊重する気風もまた、この名大から忘れ去られることがないように願っている。

良き同僚や学生たちに恵まれ、また事務の方々にも親切にして頂き、実に印象的な10年を過ごすことができたことを、感謝している。そして名大文学研究科、いや名大全体が、どんな時代にあつても、世界をリードする学問の中心でありつづけることを、心から祈っている。

教養部改革のこと

榊 達 雄



いわゆる大学紛争は、全国的に教養部改革に対しても一定のインパクトを与えたことは否めないであろう。一般教育について、学生の側からの批判の一つは、高校教育の繰り返しであるというものであった。私自身は、学生時代にそのようには思わなかったし、むしろ新鮮な感じをした講義が多かった。また、1970年代後半以降、教育学部では原書を題材にした学部の演習には、学生の参加が非常に少なくなった。こうしたことなどが背景にあって、一般教育や教養部改革には関心をもってきた。名大職組や日本科学者会議でも一般教育等の問題を取り上げて、シンポジウムを開催したりしている。教養部は学科目制に位置づけられていたため、講座制の学部にして予算が不十分であることも、教養部改革の背景にあったが、シンポジウムでは、学生の教育を充実するために、一般教育と専門教育の在り方、4年一貫教育の在り方などが議論の中心であった。こうした議論が大学の公式の場以外において蓄積されていったことは、貴重なものであったといえよう。

本学の公式の場でも、教養部改革の検討が進められていった。評議会のもとに最初に設置された教養部改革検討委員会(第一次)は、1976年3月であった。同様に設置された教養部改革第二次検討委員会は、1979年2月、教養部改革第三次検討委員会は、1984年11月であった。1989年7月には、同第三次検討委員会の専門委員会が設置されたが、これに参加することになった。同委員会では、一般教育改革構想、改善充実の具体的方策、実施体制について議論するとともに、教養部組織を改革して、新しい学部・研究科を創設することについて議論した。そして、各学部で教養部改革調査報告書の「名古屋大学の一般教育改革構想案」を検討し、その結果を専門委員が専門委員会委員長に報告し、委員長が取りまとめ、それを専門委員会で検討するという手続きが踏まれた。全学共通

科目は、専門基礎科目、基礎セミナー、言語文化科目、基本主題科目、総合科目、開放科目で構成されることになったが、当初文科系には、理科系の数学・物理学・化学・生物学等のような共通基礎科目はないという議論があった。しかし、結局各学部で科目を設定することになったが、かなり無理して決められたように思われる。なお、かなり込み入った議論になったことは、基本主題科目、専門基礎科目B(共通専門基礎)および基礎セミナーの担当のあり方についてであった。改革によって既設学部・研究科に移行する教官ポストの1ポスト当たり平均担当コマ数をどれだけにするかが、大きな論点であった。一応合意に達して、共通教育の全学出動体制ができたことは、教養部改革をスムーズに進行させた重要な要因であったと考えられる。

次に共通教育問題にかかわったのは、「全学共通教育のレビューに関するWGに置かれる専門委員会」に参加したことであった。すなわち、新カリキュラムで教育を受けた学生が1997年度末に初めて卒業するので、その実践の展開を検証するためにレビューしたわけである。学生の反応は、全般的に悪くはなかった。ただ、個人的にはその後の学生をみていると、共通教育が十分うまくいっているとは、かならずしもいえないと思っている。

こんな気持ちもあって、教養教育院が発足するに当たって、定年退職1年前にもかかわらず、専任教授として参加する気になったわけである。ほかの専任教授の方々をはじめ、統括部会議の方々にはベテラン揃いで、特別に貢献することもなかったが、2003年度全学教育における新体制、新カリキュラムの発足の準備ができたことは、喜ばしいことであった。新しい教養教育の展開がうまくいよう祈る次第である。

裏舞台での演劇のように - “ 関係 ” の中で生きた27余年間

田 畑 治



キャンパス内では、目下あちこちで研究棟や教育棟の新築、改築工事が進んでいる。反面で、それまで根づいていた樹木や植物が切り取られ、野鳥が遠のいてしまっている。印象的なのは、赴任した昭和50年8月当時、学内のグリーンベルト地帯の楠並木は幼木だったが、27年後の今や鬱蒼となり小雨の日などは雨傘代りになり、猛暑の日には陽よけになることである。通勤の途上、ここを歩いて行くと、風が吹くと木々の葉ずれの音や香りが楽しめ、人間と同様一本一本の姿や形が異なり、個性的なのが面白い。

私は臨床心理学を専門としてきている。心理学という、伝統的に実験・観察や調査の方法で行われると考えられる向きがあるが、われわれの方法は面対面での面接や関わりながらの観察が主体である。前者は、自然科学的な法則定立的なアプローチであるのに対し、後者は歴史科学での個性記述的なアプローチである。現実具体的に存在する生身の苦悩する人間の“個”に迫りながらも、人間の“普遍”を求める営みを特長とする。その相手も、実験や調査では三人称的な被験者(Versuchs - person)と呼ぶが、われわれの相手は、二人称的なクライアント(client)と呼ぶ。相手はあなたであり、“あなたとわたし”の関係を重視する。そもそもクライアントとは“顧客”という意味であり、医学で相手とする患者(Kranke; patient)でもないのである。

心理学一般が対象とするのは、子どもでも成人でも、大抵いわゆる普通の状態の人々である。これに対し、われわれが臨床的に相手にするクライアントは、どこか不自然な感じをもち、生きることに不安や困難を感じ、それから抜け出したいと援助を求める人々である。会っていくこちら側は、面接室という物理的に“守られた安全な空間”で、一定の時間 - 大抵50分 - これらの人々との関係の中で援助的に関わっていくうちに、相手が次第に自然な感じになり、生きていくことができるようになることを目指す営みをしている。

演劇でいえば主役はクライアントその人であり、こちらは脇役ないし黒子であるが、演劇のように表舞台におけるような派手さはない。どこか地味で、まるで忍者のように会う。頼りにするのは、相手の人が生来持っている成長への力である。今日でこそ部屋には冷暖房装置が設置され、室温は快適な温度が保たれてきているが、かつては夏場に室温が30 を越えるような日もあった。しかし相手の苦悩をともにしながら、次第に変化していくのを同行しながら見届けていくのが楽しみになる感じで継続してきた。また在外研究の体験で、アメリカでは週に二回以上会う場合があることもあり、文化や習慣の相違を感じた。

カウンセリングや心理療法は、多くの人が考えているように、決して楽しい、天国のようなものではなく、その過程は苦痛で、地獄の最中を歩むような感じの時さえある。しかし相手が辛さに耐え、克服していくことを二人三脚で歩み、季節のように“冬来たりなば、春遠からじ”の心境で会っていくとき、新しい道が見出せると終結や別れがくる。その際、自己の健康管理に努めながら、相手の人と関係を継続し、来る日も来る日も会っていくのである。相手がつくため息に、そのメッセージの意味を感じ、感涙に共感し、言葉にして伝え返していく。表舞台では見られない、裏舞台での演劇でのつき合いであった。このような裏舞台を提供していただいた名古屋大学に感謝する次第である。

今後、“こころの科学”がさらに発展し、現実に生きる人々に貢献するとともに、名古屋大学のさらなる発展を祈念する次第である。ありがとうございました。

一般教育と教養部改革を振り返って

小木 曾 基 弼



昭和41年（1966年）名古屋大学教養部に助手として採用され、それ以来37年余を教養部と教養部改革後の情報文化学部在籍して一般教育に携わることになった。この間の一般教育の大きな変革は、名大紛争直後の昭和46年度（1971年）カリキュラム改革と、59年度（1984年）カリキュラムを経て、教養部改革とともに平成6年度（1994年）から実施された四年一貫教育体制である。新制大学発足からこれらの改革に至るまでの経緯については「名古屋大学五十年史 部局史二 第11章 教養部」に詳しい。そこには、一般教育の理念、カリキュラム問題、教養部改革構想、教養部と学部との関係など一般教育と教養部の抱えていた多くの問題が記されており、一般教育を考える上でその歴史に学ぶべき点は多い。部史の最後の部分は、昭和63年度（1988年）概算要求における教養学部・総合学術研究科の設置を骨子とする教養部改革構想の記述で終わっている。その後しばらくの間はこの構想での改革が模索され、教養部内でも検討が重ねられたが、平成3年（1991年）から、4年の人間情報学研究科設置、5年9月の教養部廃止までの変化は急激であり、差し迫った教養部解体の圧力によって、それまでに議論が積み重ねられてきたものからは大きく異なる形で改革が押し進められていったという印象が強い。もし教養部改革の議論のなかでもっと早い時期に一般教育の全学協力体制が確立していれば、より自然な形で教養部改革が実現したのではないだろうか。

教養部改革とともに出発した四年一貫教育体制は、情報文化学部・人間情報学研究科担当以外の旧教養部スタッフが全共通教育科目（外国語科目と保健体育科目を除く）を担当するというもので、その上多様な授業科目が開講されたこともあって、担当者には過大な

負担となっていた。全学共通教育体制を目指すのであれば、各学部がこれらの共通教育担当者とともに1～2年次の学生に対する教育を分担するという視点もあったであろう。また、46カリキュラム改革時に学生との意思疎通が配慮されなかったことも問題であった。

結局、新たな学部・研究科の再編成によって、ようやく教養部改革後約10年を経過した来年度から、新しい教養教育体制が再発し、曲がりなりにも各学部・研究科がほぼ同じ立場で共通教育を担うことになった。一般論として教養教育の重要性を否定するものはいないが、現在、当初の全学共通教育の理念は次第に変質して、個々の場合では各学部の教育方針がより前面に出ており、研究組織と両立させてどのような教育組織によって教養教育を実施していくかは今後の大きな課題である。大学における教養教育の理念や実施体制の問題については引き続いて検討されていくであろうが、大学を評価する上で教育は研究以上に重要な要素であり、良い研究は良い教育からと考えれば、学部・研究科の壁を乗り越えて、より良い教養教育の環境が実現されていくのではないかと思う。

最後に、長く勉学と研究・教育の場を与えていただいた名古屋大学に感謝し、これからの発展を祈念するとともに、在職中にさまざまなご厚情を賜った皆さまにお礼申し上げたい。

ああ面白かった

熊野 聰



1986年4月に転勤によって赴任するまで私は名大とも名古屋とも縁がなく、66年の春休み、全国大学院生協議会の代表者会議に出席するため名大教育学部棟を訪れたのが最初で、以後は機会がなかった。66年の名大は新築移転して間がなくきれいだったが、20年後に赴任したときはずいぶん埃っぽく、はや老朽化の感があった。おそらくわが国としても安普請だったのだろう。ヨーロッパの大学は古い建物ほど風格があるが、郊外移転にともなった日本の新築大学とおなじような外見の建物でも、こんなに早い老朽化は見たことがない。

名古屋は風土、気候、人間、物産いずれも暮らしやすいところで、もっとも感動したのは食い物がうまくて安いことだった。最初の2年間、彦根から通勤したが、プラットフォームできしめんを食べるのが楽しみだった。引っ越してきてからみそ煮込みうどんを食べた。最初の一口から大好物となった。みそカツも好きだ。鶏は元来好きでないので、ひとり1万円の鶏を食わせられたときは驚いた。以後二度と食べない。うーん、うまくて安いではなくて、安くてうまい、だなあ。

名大に来てよかったことは、研究環境以外にもたくさんある。ひとつは学生の質が高いこと。私が来てから17年のあいだ、学力が落ちたとの世論があり、数字的に実証してみせる先生もいる。たしかに昔だったら中学高校時代に読んでおくような文学作品を読んでいないとか（ドストエフスキーのことではない、ロビンソン・クルーソーのことだ）、国家と個人について話そうとしても、その種の勉強をしていないうえに問題関心がないので、よほど基礎から話さないといけない、というようなことはある。しかしそれは知識のことで、学力をそう捉えれば低下であるが、理解に達しうる能

力もまた学生の質である。部活に入り込んでろくに授業にも出ていなかったような子が、ゼミ指導するとメキメキ（というほどでもないが）理解力を高め、いっぱい卒論を書いて驚かせる（こともある）とくに最近では学生が教室で質問しないので、この学期は失敗だったかなあ、と落ち込んでいると、意外にもいいレポートが出てきたりする。学生の学力水準について安易に期待して臨むと失敗することが多いが、問題をうまくわかってもらったときは満足する結果がえられた。

思い出しても満足感が蘇るようないい学期というのはじつはそう多くはないが一例。97年だったか、理系セミナーで「古典を読む」と題して『赤毛のエイリークのサガ』という13世紀のアイスランド文学を取り上げ、英訳で読んだ。1000年ころヴァイキングが北米を発見・探検した物語で、大方の学生に好評だった。作品の内容を真実と仮定し、地理、海流を考慮し、彼らの航路と上陸点を地図上に特定せよ、という課題を与えたが、いい結果だった。教師として満足した例である。「古典を読む」シリーズは私にとっても文芸史料を一字一句精読する機会になった。

17年間少なくない教職員の皆さまのお世話になり、迷惑をかけ、有意義なおつき合いをいただいたが、とくに学生・院生諸君には感謝の気持ちでいっぱいである。

定年退官

黒田 義 浩



いよいよ、定年退官である。かと言って、ことここに至って、特に何か言い残したいことがあるわけでもない。この際、これまでの人生で自分の心に引っ掛かっている事柄について、徒然に思うところを書かせていただくことにしたい。

私が「研究者」を意識し始めたのは高校生の時でした。その当時、私は数学と物理の好きなごく平凡な少年でした。ある日の物理の授業中に、私が黒板で与えられた演習問題をぶっつけ本番で解いていると、それを見た教師がべた褒めに褒めてくれたのです。それは、有限の断面積をもった柱の両端に圧力をかけて、その縮みを計算するという極単純な問題でした。そのような問題の答えに、何故、教師がそれほど感心したのか、その真相は今でも解りませんが、その日以来、本人はすっかりその気になって、「京大理学部に入って理論物理学の研究をする」と決め込んでしまいました。

1958年4月、京大理学部に入ったのですが、学部に進級する頃は、60年安保の真っ最中で、学問どころではありませんでした。私は、典型的なノンポリ学生でしたが、それでも、連日、クラス討議やデモには参加せざるを得ない雰囲気でした。そんな有様ですから、碌に講義も受けられず、家でも勉学意欲を欠く日々が続きました。そんなところに、樺美智子さんの事故を知らされました。樺さんは、中学・高校の2年先輩で良くできる人として尊敬しておりましたから、大変なショックでした。その上、安保は強行可決され、私は敗北感に打ちのめされてしまいました。結局、4回生の分属でも、会社への就職を前提に物性実験の研究室を選んでしまいました。会社への就職を選んだ理由の一つに、大学院に進学して、経済的に自立してやっていけるとの自信がなかったことが挙げられます。

結局、1962年4月、東京芝浦電気 K.K. に就職し、中央研究所物性研究部に配属されました。当時は、大研究所建設ブームで、それに伴って新人教育も盛んでした。私も1年間新人教育を受けた後、研究テーマとして超伝導材料開発が与えられ、まずは文献調査から始めよとのことでした。独りで文献を調べている中に、ドンドン遡って、結局、まずはBCS理論を理解しなければと言うところに行き当たってしまい、相談できる相手もなく、独り悶々としていました。そうしている間に、「どうせ研究するのなら大学で超伝導理論を」との思いが湧き上がってきました。結局、東芝を1年11ヶ月で辞して、1964年4月、京都大学大学院理学研究科修士課程に入学しました。

大学院に進学した後は、超伝導理論の勉強に専念しました。しかし、いみじくも先輩の研究者が云われたように、「超伝導理論はBCS理論で終わった」のごとく、私自身は、それから10年間、超伝導がらみのまともな論文は書けませんでした。最初のもともな論文は、液体³Heの超流動転移に関するもの(1974年)でした。それに続いて、2次元電子系におけるアンダーソン局在と超伝導の競合に関するもの(1982年)、重い電子系の超伝導に関するもの(1984年)そして、締めくくりが高温超伝導の異常金属相図に関するもの(2002年)ということになります。

ここに至るまでには、大変多くの方々のお世話になりました。この機会に、感謝の意を表したいと思えます。ほんとうにありがとうございました。

わが憧れの名大よ永遠に

郷 通子



名大の理学研究科を受験するため女子寮に泊めてもらったのは1961年の10月だったと思う。新幹線はまだ開通していない時である。東京から名古屋に来るには、準急列車の東海号で8時間かかった。特急おおとり号では4時間半であったが、お金のない学生に特急は手がとどかなかった。「ひとりで旅館に泊まるよりも精神安定剤になるから女子寮に泊めてもらいなさい」と、勧めてくださったのは、学部時代の指導教官であった大野鑑子先生（当時お茶の水女子大助教授、現北大名誉教授）である。理学部学生掛に手紙を書いたところ、受け入れてもらえたよき時代であった。当時、大学院の入試は秋休みに行われていた。泊めてもらったのは、できて間もない女子寮で、文学部仏文専攻の成田翡翠さんの部屋だった。その晩は入試の前日であるにもかかわらず夜遅くまで話しこんでしまったことを思い出す。それ以来、お互いに結婚や子育て、両親の介護にわたる長い年月のおつきあいが続いている。

「東京には大学も多く、進学先としていろいろ選択肢があるのに、わざわざ名古屋までいなくてもいいでしょう」といわれる先生もあったが、生物物理学という新しい学問分野を日本で始めた研究室が名大理学部の物理教室にあることを知ってから、大学院は名大に行こうと心に決めていた。物理と生物の境界にあるらしい学問を物理の先生たちが始めたこと、高分子物理からウサギの筋肉収縮の研究へ移行している大沢文夫先生の研究室の紹介記事や写真を見て、おもしろそうな集団だと強く心惹かれた。

大学院生として理学研究科物理学専攻に入学してから、41年の歳月が経過したが、ついに筋肉収縮には手につかず、蛋白質やDNAの統計力学から分子進化、生命情報学へと、勝手きままな研究を好きなように進

めてきた。このようなことを許してもらえる雰囲気があったから、できたことだとありがたく思っている。博士課程修了後、名大を離れから30年あまりを経て、幸運にも生物学科に研究室を持たせていただくことができた。スタッフとして名大に戻ってこられるなど、まったく思いもよらないことであったが、九大の助手時代にひとりで行った研究を認めていただけたのだろう。国外で評価されたことが、国内での評価につながったのだと思う。「我が道を行く」ことの大切さを、誰にいわれたわけでもないのに、砂漠の砂が水を吸収するように自然に先生や先輩から学ぶことができた名大時代だった。

大学での仕事は教育と研究の両輪を伴っていることはいうまでもないことである。しかし最近、当たり前のことがそうでなくなってきたように感じる。研究を通してひとを育てることは大学の最大の任務であり、大学での最大のやりがいのある仕事である。振り返ってみれば名古屋大学での14年間に、どれだけのひとを育てることができたかと考えると、私のなし得たことはささやかなものであった。院生時代におおいに影響を受けた先生方とは較べようもない。国立大学の法人化へと進むことは今や疑いのない事となってきた。これからも、個人が思いのままに学術研究を展開できる環境を尊ぶ自由闊達な進取の気風を名大は失ってはならない。個性輝く教員にとって名古屋大学の一員であることが魅力を失ってしまわないよう、アカデミズムが支配する大学であり続けて欲しいと思う。「わが名大よ、永遠に若人の憧れの的であれ。」と願いつつ、お世話になった多くの方々に心からお礼を申し上げます。

大学に育まれて

太田 龍朗



大学受験の専門誌に「蛩雪時代」というのがあった。中を開きページを繰ると名古屋大学の紹介に目が留まる。各学部の主要講座の教授が一覧となったうえ、その学部の特色や解説記事が詳しく載っているが、“理論物理の大家坂田昌一”といった文字や、“血液学の権威・天皇の侍医勝沼精蔵”などという記載が踊り、当時の錚々たる研究者の名が連なって夢多き受験生であった私を魅了した。念願かなって入学を果たしたのが昭和35年(1960)であったが、旧第八高等学校跡の校舎は木造で、今にも崩れるのではないかとと思われるほど古く、蛩雪時代がいつ旧帝国大学”は一体どこにあるのかと夢が半ば色褪せて行くかのようであった。加えて入学するなりあの「安保騒動」に巻き込まれ、毎日授業がない日々を余儀なくされた。隣県の国立医科大学の教官として奉職した時期を含めた40年近い大学生活は、かくも複雑な気持ちを抱えてのスタートであった。

新築されたばかりの豊田講堂での第1回入学式に、田舎からいそいそと出て来た故人となった父が、“入学金と半期授業料を支払っても一万円でお釣が来たゾ”と言って嬉しそうにしていたのを思い出す。その豊田講堂を中心に広がる今日のキャンパスは、外国人を呼んでも決して恥ずかしくない立派な建物が林立するようになった。時折全学の会議のために鶴舞から出かけるが、緑が多く、“大学”の雰囲気漂う構内を歩くときには、鶴舞の雑然としたキャンパスと比較して、いつも羨ましく思うほどである。

医学部に進学してからも、勉強半端で合唱団に憂き身をやつすことになるが、時折慰問演奏で訪れた精神病院での体験が、終生の仕事を定める大きなインパクトとなった。当時わが国のこうした施設におかれた障害者の環境は、海外の調査団から厳しい指摘を受けるまでもなく、実に惨澹たるものであった。20世紀初頭に欧州の留学から帰国したのち、東京帝国大学教授となった呉秀三をして、“わが国の精神病患者はこの病いを得たる上に、この国に生れたる不幸を重ねると言うべし”と嘆かした状況は、それから半世紀以上

を経た当時でも、いささかも変わっていないようにみえた。だが、医療従事者や当事者の粘り強い努力の甲斐あって、この4半世紀で格段の改革が行われ、大きな進展がみられたこともまた事実であり、実に隔世の感を禁じ得ない。

翻って、精神医学の研究はどうかと問えば、不治の病と永く恐れられた統合失調症(精神分裂病)をはじめ、多くの病態の解明や治療開発、リハビリテーション等の研究に著しい進歩がみられ、障害者がそれと意識しないで健常者とともに生きることができる環境づくりに大きく貢献してきたことは間違いない。こうした活動の一角である学究生活に何故入ったか今でもよくわからないが、initiationの衝動のうちに、その時々優れた指導者や頼り甲斐のある協力者に恵まれて、ここまで辿り着くことができたというのが正直な実感である。時あたかも、大学院重点化により、精神医学講座は精神医学、精神生物学、児童精神医学の3分野に独立し、加えて昨年4月には国立大学附属病院ではじめての児童精神科が独立し“親と子どもの心療部”が設置され、増員もあって3分野1診療部に各1人の助教授が配置されるなど、画期的な改革を認めていただいた。

世は正に分子生物学の時代に入ったが、精神医学もその恩恵に浴さない訳にはいかないであろう。研究のあり方も様変わりつつあり、今日インパクトファクターなどに象徴されるグローバル化が叫ばれている。学問に世界的視野と地球規模の発想が必要であることは論を待たないが、世界の経済レベルでは“グローバル化の優等生”であった南米のある国が、国策の誤りから莫大な負債を抱える債務国となり、食うや食わずの多くの人々をつくりだして貧困のどん底に喘ぐ現状を見ても、学究の世界にあっては、経済原則のみが先行するようであってはならないように思われる。

憧れの名古屋大学に育まれて40数年、これまでにお世話になった全ての方々に厚く御礼申し上げて、惜別の御挨拶といたします。ありがとうございました。

名大を去るにあたって

久場 健司



私は、昭和40年に久留米大学医学部を卒業後、京都府立医大でのインターン、九大外科での臨床研修、九大生理学での大学院、九州厚生年金病院での外科勤務、米国ロヨラ大学、ニューヨーク州立大学(バップアロー)への留学後、久留米大学医学部生理学講師、助教授を努め、昭和54年から新設の佐賀医科大学生理学で教授を務め、平成8年1月から名古屋大学医学部で生理学を担当しました。

医学部卒業後は、外科医になることを選びましたが、大学院での神経筋興奮伝達に関する研究から生理学の面白さを知り、30歳に手が届く頃、生理学の研究に一生をかけることにしました。私が生理学を始めた頃は日本のエレクトロニクスの勃興期で、これとともに電気生理学的な研究が急速に進歩し、日本人の研究者がその器用さを生かして、世界をリードしていた時代でした。私にとっては、電気生理学は高校時代に熱中したエレクトロニクスの趣味の延長に近く、直にその虜になりました。大学の教師になってからも、幸運にも上司の頼道教三教授の御配慮により、教育の義務以外の実務的な仕事を一切免除して頂き、生理学の研究に没頭することができました。また、佐賀医大では、開学時に問題点を十分考慮した管理運営システムが組み立てられ、多くの管理運営業務は学長と病院と教育研究担当の二人の専任副学長に任されており、教授会と委員会では余程の問題がない限り原案修正の議論に留まり、一般の教授はそれほど管理運営業務に時間をとられず自分の研究に専念できました。このお陰で、電気生理学から光を使った生理学の研究へと展開することができました。

名古屋大学での7年間は充実した楽しい日々でした。本学との関わりは、共通教育の委員会と図書館の商議員会でしたが、専門の異なる教官の方々の発言からかなり医

学部とは異なる発想を伺うことが出来ました。また、理学部物理学教室(木島博正教授)との共同研究を通して、生理学は医学の中でも最も論理的であると高を括っていたのですが、しばしば考え方の甘さに気づかされました。さらに、学生が非常に優秀で、学生実習や研究室配属の学生の反応と理解の早さに心地よいものがありました。研究の面でも、優秀な大学院生や学部学生や理学部との共同研究を通して、米国留学中に発見した神経細胞でのカルシウムイオンの細胞内遊離機構の解析や神経のインパルスの化学伝達での役割をある程度解明することができ、ライフワークに一区切りつけられたような気がします。

ただ、総合大学である名古屋大学に来て、単科大学とは異なり、会議の多さと意思決定の過程の超民主的なことに少し戸惑いを感じました。多くの教官が、大学の“雑用”をきちんとこなしながら、自分自身の研究を進めておられることに感心しましたが、やはり大学人は教育と研究(臨床医学では、診療も)に専念すべきだと思います。円滑な管理運営が自動的になされる簡素なシステムを構築し、管理運営は教育と研究に優れた実績と高い理念と見識を持った少数の管理者に任せ、これに教官や学生からの効率の良い意見反映と、予算や人事を適切、公平、円滑に行うための評価システムがあれば十分ではないかと思いますが、如何でしょう。また、事務組織と業務を簡素化し、科研申請や単位認定等に関しての本学と部局での2重業務は最小限にすべきではないでしょうか。

以上、退官にあたり名古屋大学での印象と私なりの考えを述べさせて頂きましたが、名古屋大学在職中に多くの方々に公私共にお世話になったことを心から御礼申し上げますとともに、法人化を契機として名古屋大学が今後益々発展することをお祈りします。

婦人科病理診断の実践の中から

中 島 伸 夫



昭和34年入学以来今日まで名古屋大学のお世話になりました。昭和40年に名古屋大学医学部を卒業、1年のインターンの後病理学教室に入りました。それ以来36年あまり病理解剖と外科病理診断に関わって来ました。昭和41年教室に入った頃は電子顕微鏡の全盛期でありました。横紋筋の中に無数の封入体が出現する奇病の検索を電子顕微鏡を使って行い封入体の正体を明らかにしました。ヒトでも、マウスでも横紋筋の変性萎縮の過程で同様の封入体が出現することを知りました。昭和46年から臨床に直接した外科病理の分野に移りました。名大病院において提出されるすべての腫瘍の発生部位、相対的頻度、性、年齢などを順に記録しました。この症例を集積する過程で、卵巣の奇形腫には成人のほとんど全ての組織(臓器)が、細切れになって不規則に出現しますが、肝臓のような重要臓器が見られないことに疑問を抱きました。そこで全身の胚細胞を起源とする腫瘍について肝臓を調べました。胚細胞腫瘍の各組織型について肝臓組織がどんな頻度で、どのような組織像で現れ、その肝臓組織がどんな組織を起原として分化してくるかを明らかにしました。ポリエンブリオーマでは未熟から成熟の肝臓組織が最も多く見られました。卵巣腫瘍、精巣腫瘍の組織型の中にポリエンブリオーマという受精後14日前後のヒトエンブリオに類似したembryoid body (EB) が無数に出現する腫瘍があります。EBは奇形卵が処女生殖することによって形成されたエンブリオであり、それが多数集まったのがポリエンブリオーマである(Peyronの奇形卵の処女生殖説)との考えがありました。標本の一切片をみると、ポリエンブリオーマにはEBだけではなく、常に成熟した消化管、肝臓組織、扁平上皮の小胞巣が点々と互いに離れて出現します。そこでEBと

既知の成熟組織を含むパラフィンブロックを選びだし、それをマイクロームで厚さ5 μ mの連続切片とし、その再構築を行いました。その結果、EBはbodyではなく、蛇行する管であること、EBは成熟した消化管(内胚葉)に連続すること、肝臓組織が卵黄嚢上皮から生ずることを観察し、Peyronの説は間違いであることを示した。そしてEBは前腸に似たポテンシャルを持ち、食道を含む消化管、胆管、肝臓に分化する過程にある構造であると結論しました。

多くの絨毛が腫大する特徴を持つ全胎状奇胎について、腫瘍、あるいは流産であるとの二説がある。婦人科医の多くは腫瘍と考え、一部の病理医と婦人科医は流産とみる。私はこの両者の間を行ったり、来たり、しておりました。そしてWHO(1994)は「全胎状奇胎(全奇胎)の絨毛の間質には血管はないか、あっても僅かである」と記載しているが、これは正しいか検証することになりました。従来の血管の内皮細胞に対する免疫染色、FVIII、UEA-1などは正常の若い絨毛にも、奇胎絨毛にも染まりませんでした。しかしCD-34では血管が陽性に染まることが判明しました。さらに血管を電子顕微鏡を使って確かめました。連続切片、CD-34免疫染色を用いて、血管が絨毛嚢胞から次の嚢胞へと連続して走行することも示すことができました。さらに奇胎絨毛の血管構築と、正常の6-8週の絨毛のそれとが類似していることが分かりました。奇胎絨毛の間質には正常絨毛では見られない間質細胞と血管の変性が著しいが、両者には質的な差は見られない。すなわち胎状奇胎は流産である可能性を示しました。

名古屋大学には大変長い間お世話になりました。大学のますますの発展を祈念しております。

我が学び舎の名古屋大学

稲垣 康善



毎年この時期になると、ご退官の先生のことばに接し、感慨をかみしめてきましたが、私自身がお礼を申し述べる時がきました。私は、本学教育学部附属高等学校の卒業生ですので、その時から数えると丸48年間名古屋大学で学び続けることができました。本当に有難うございました。心からのお礼を申し上げます。昭和33年4月に名古屋大学工学部に入学を許され、翌年10月に電子工学科の第1回生として学部に進学しました。その後大学院に進み、昭和42年に電子工学専攻博士課程修了と同時に、本学の教官となりました。それ以来、本学で研究と教育に携わり学び続けることができたことの幸せをかみしめています。

本学入学のころのことを思い出すと、昭和32年(1957年)にソ連が人類初の人工衛星スプートニクの打ち上げに成功し、ピーピーという音を出す電波を飛ばしながら3、4本の細いアンテナを付けた球形の人工衛星が地球を周回し、翌年にアメリカ航空宇宙局(NASA)が発足した頃でした。一方我が国では、それは、「もはや戦後ではない」と昭和31年に経済企画庁が言い、科学技術振興が国是となり、工学部にも次々と新しい学科が創設されていった時期でもありました。昭和33年の電子工学科を始めに、年毎に、新しい学科が設置され、昭和42年頃には、ほぼ現在の大きさの工学部となりました。

その間には、昭和34年の伊勢湾台風、昭和35年の60年安保、70年安保を前にした昭和43、44年の大学紛争など、幾つかの大変なことがありましたが、昭和45年(1970年)に大阪万博があり、それ以後の昭和の時代は豊かさの中に過ぎたと思います。そして平成の時代になり、大学の設置基準の大綱化が行われ、教養教育改革と大学院重点化が進められ、もちろん、工学部の大学院重点化もありました。いま、大学は、独立法人化を前に、また激しく動いています。

私は、卒業研究を始めるとともに、そのころ萌芽期にあっ

た情報分野の研究に入りました。情報に関する教科書などはほとんどない時代でした。今のように関連の学会が幾つもあるわけがなく、電気通信学会や電気学会へ研究発表や討論に出掛けたのですが、同じ分野の研究者はほんとうに少数でした。しかしこれから成長しようとしていた情報の学問の流れの中に身を置くことができたことは、幸せであったと思います。また、若い名古屋大学が、特に工学部の電気教室がそうであったのかもしれませんが、自由にテーマを選び新しい研究を始めることを応援する雰囲気であったことも、新しい分野に飛び込んでいくのに良かったと感謝しています。

それから、40年がたちました。その間、電気系学科にも情報や計算機関連の講座ができ、本学に大型計算機センターが設置されました。また、工学部に大学院課程だけの独立専攻として情報工学専攻ができ、情報処理教育センターができました。そして昭和60年に情報工学科の学部組織ができ、本学でも情報工学科で学部教育を受けた学生が情報工学専攻に入ってくるようになりました。平成の時代になり、教養部改革とともに、人間情報学研究科、情報文化学部もできました。情報処理教育センターは、情報メディア教育センターに、大型計算機センターは情報連携基盤センターになりました。そうしてこの4月には、人間情報学研究科と工学研究科情報工学専攻が中心となり新しく情報科学研究科が発足する運びとなりました。このように情報の科学と工学の発展の時代に、良き師と友に恵まれ、学生に囲まれて、この名古屋大学で学び続けられたことは、得がたい幸せであったと感謝しています。

我が学び舎の名古屋大学の益々の発展を祈りつつ、心からのお礼のことばといたします。

定年を迎えて

- 名大へ戻ってからは、あっという間の6年でした -

小早川 久



つくば研究学園都市にある高エネルギー物理学研究所（今は高エネルギー加速器研究機構）から、6年前（1997年）に名大の工学部へ戻ってきた。79年までは理学部物理にいたので、つくばには18年ほど暮らしたことになる。高工研ではフォトンファクトリーという高速の電子がつくる放射光を先端的な研究に利用する施設に関わってきた。名大でも小型の放射光施設を作る計画があり、それを担当するというので微力ながら少しは母校の役に立てればと思い戻ってきたのであるが、予算が認められないまま早くも6年が経ってしまった。

理学部の物理学教室にいた時代は、東京田無にある原子核研究所の高エネルギー電子加速器を用いて、日本で始めて間もない素粒子実験をやってきた。当時の研究条件は劣悪で、大きな建物の中に大掛かりな実験装置を構築するのであるが、空調がないので夏は猛烈に暑いし冬は寒い。連日の徹夜で疲れてはてて地面に座り込んでしまうという大変な実験だったが、それが今ではなつかしい思い出となった。そのころ新幹線や高速道路ができ、東京、名古屋を猛スピードで日帰り往復するようになった。科学技術の発展に目を見張り、こんな物を作る人間とはたいしたものだと感心したものだ。経済も相乗効果で指数関数的に伸びていた時代であった。

つくばは名古屋よりはるかに田舎であり、通勤してからも名古屋の発展ぶりがやたらと目についた。戻ってきた名古屋は地下鉄や高速道路が発達していて、さぞかし便利で暮らし良くなっているものと期待していたが、意外なことに名古屋は以前より暮らしにくい。いったいこれはどういう事なのだろうか。車の渋滞、自然破壊、大量のゴミ、犯罪の増加。大掛かりな高速

道路やマンションの建設現場を見ているともう止めてほしいといたくなる。大学もなにか余裕が感じられなくなっていた。

工学部の材料工学とは私の専門とはえらく違うところである。放射光施設の予算が認められるまでの短い間ということでの配属でした。高工研で使い慣れた実験装置などは、共同利用研究所の物なので全部置ってきた。名古屋では新しく装置作りから始めなければならなかった。専門分野が違うため共通する装置が全く無い。ちょっと借りて間に合わせるができない。そんな不便があったが、フォトカソード材料の製作など、材料工学ならではの利点を活かすことができ、他では得難い経験を沢山させてもらった。また理学部時代の旧友たちにもおおいに助けられた。

放射光は高エネルギー物理学の副産物であるが、物理に限らず化学、生物学から産業や医療に利用が広がっている。面白いことに試料から検出される非常に微量な元素を詳しく分析することができるので、その試料の発展経路や歴史を推測でき考古学にも使われる。また最近では犯罪捜査にまで使われるようになった。このように理系文系を問わず、基礎研究から新ビジネスまで、さらにはいろんな分野が集まるのでその相互刺激で思わぬ方向への展開が考えられ、無限に発想が広がる楽しい分野である。知の拠点であることは大学の役割ですが、暮らしよい社会をつくるための知恵を出すことも大切です。そのためにも放射光は必要な装置ですので、今後も粘り強く施設の設置に力を尽くされることを望みます。名古屋大学の発展を心からお祈りしますとともに、お世話になった皆様に厚くお礼申し上げます。

退官にあたって

鳥 脇 純一郎



昭和33(1958)年4月に名古屋大学入学以後45年、昭和42(1967)年4月名古屋大学工学部助手採用以後36年、これが私の名古屋大学在籍記録である(厳密にはこの間3年間豊橋技術科学大に勤務した分が除かれる)。

学部は工学部電子工学科の第一回生である。当時は2年生後期に進む時点で学科を選べたので、理由は覚えていないが、あえて新設の学科を選んだ。従って、本学の電子工学科も1期生が定年を迎えるだけの年数を重ねたことになる。そのためかどうか、以後大型計算機センター、豊橋技術科学大学、本学情報工学専攻、情報工学科、そして最後の情報科学研究科と、いずれも新しい組織の準備、立ち上げ、またはその両方の時期に参加するといわゆる「あわせ」になった。雑務が著しく増えるのには閉口したが、既成組織にはないエキサイティングな経験が沢山できた。奇しくも情報科学研究科の新設が決まったところで終了する。

学問領域では、情報工学(この言葉が認知されるのは実はかなりあとである)しかもテレビジョン放送50周年にも代表される映像情報の処理に携わったことになる。その中でも医用X線像の計算機診断の研究は恐らく世界的にみてもパイオニア的研究になった。さらに、Hounsfieldの計算機断層撮影法(CT)という大発明に助けられて、1980年代以降はパーソナル人体をベースとしたコンピュータ外科と仮想化内視鏡システムでもう一度パイオニア的な仕事をできるという望外の幸運に恵まれた。私が医学分野との境界領域に携わり始めた1965年当時、この分野はmedical electronics(ME・エム・イー)と呼ばれていた。今でいう「医工連携」を40年近く前から実践していたことになる。もちろん、研究全体の背景には計算機という途方もない「怪物」の高度成長があって、デジタル画像処理やコンピュータ・グラフィックスも、ほとんど最初(1960年代)から関わらうことができた。

生活面では、いわゆる「60年安保」といわれる1960年(日米安全保障条約改定 昭和35年)を学生運動の拠点の一つであった嘸鳴寮で過ごし、デモに参加した回数も数知れずという学部生時代、大学紛争に揺れた助講層時代、4年一貫教育と大学院重点化に追われた教授時代、それぞれに忘れ難い。

このように書くと、研究ではいかに新しいトピックを追っているように見えるかもしれないが、本人からみると追いかけたという感じは全くない。むしろ、濃淡画像のパターン認識という途方もない難問(といことが今ならわかる)をテーマに選んで、そんなことはとてもできないと言われながら一人で粘っていたら、いつの間にか始めは離れていた世の中の動きが接近してきて、

合流したという感じである。その間も世の中のベクトルと自分のベクトルの距離は離れた近づいたしている。

最後に、少し長いですが、私が計算機診断のある小学会の会長を定年を機にやめたときに頂いた先達のT博士(先代の会長)の言葉を引用させて頂く。

「本当に長い間ご苦労様でした。新しい分野をつぎつぎと生み出す斬新な「視点」あるいは「哲学」を創世したという意味で先生のお仕事は近來にない偉大な仕事だと思います。残念なことにも多くの評価者は、底流にある大きな流れは見えないので、その流れを作った仕事より先、その流れの上に作られた波の方に注意が行くようです。いずれにせよ、わたくしは、できあがった高速道路を速く走るよりも、高速道路そのものを建設する方を高く評価したいと思います。あるいは設計図を作ることにも創造性があると考えます。これからはお互いに刺激し合ってがんばりましょう。」

これは、大変嬉しい言葉ではあるが、もちろんかなりの過大評価でもある。しかし、私はここにむしろ評価者(あるいは教育者)の重要性和難しさが指摘されているように思う。昨今のノーベル賞に関連して言われていることでもあるが、本当に優れた研究者の評価は非常に難しい。例えば、論文数にしてもその引用回数にしても分野としてはある程度できあがった後の評価である。だからといって特許の件数や金額で評価できると思えない。昨今は会社は社外、大学は学外者による「外部評価」ばやである。呉々も一見もつもらしい(が実は短期的な)評価で「角をためて牛を殺す」ことにならないように健全な発展を望みたい。ひるがえって自分の博士課程時代をみると2~3年は論文1編も無し。それでも研究をやらせて頂いた名古屋大学にただ感謝するのみである。そして、この時期に、ちょっと変わったことをやっていたとしか見えなかったであろう私を、あえて厚生省がん研究助成金のある研究班の会議に呼び出して発表の機会を与えて下さった当時の放射線医学の大家U博士にはいかに感謝しても足りない。

今週の研究室セミナーでは修士1年の学生がアメリカの国際会議で初めて発表するというので発表練習をやったところである。私は今でこそこの分野はお前がパイオニアだよと言ってももらえることもあるが、海外での最初の発表は30才のとき、長期の海外留学経験はついに無かった。時代は確かに変わっている。

およそ40年を振り返ってみると、よき師、よき協力者、よき学生に恵まれてエキサイティングでチャレンジングな研究・教育を存分にやらせて頂きました。本当に有り難うございました。

退官にあたって

西 淳 二



私は名古屋大学に7年間お世話になりました。前の職場は民間の建設コンサルタントであったことで、大変新鮮に、かつ毎日が楽しくすごすことができました。先輩、同僚の諸先生方、ならびにお付き合いいただいた学生さんの方々、深く感謝申し上げます。

私は昭和40年に大学を卒業し、前述のコンサルタント・エンジニアとなり(形だけ)、高速道路の設計、都市計画・交通計画の関連業務、環境アセスメント業務、地下空間利用活用の調査研究、などなどに携わったわけですが、それぞれの業務で発注先の諸先輩からも、仕事のみならず、お酒の飲み方、カラオケの仕方、マージャンの仕方などについてご教示をつけて、今日があるような次第であります。

一番感銘を受けたことのひとつは、大学の諸先生方の教養の高さ、広さでありました。専門領域のことでは、こちらもそれなりの自信というか自負をもっていますが、専門以外の「とんでもない」ことへの造詣の深さみたいなものは、さすがプロの教授ということで感心・感嘆を覚えた次第であります。こちらは、サラリーマンに毛のはえたような、教養レベルですから、すぐにシャッポを脱いで、ごめんなさい、というわけでした。

しかし63歳という年齢も、昔考えていたころと比較して、なかなか枯れてハイ引退というわけにはいかないような、世間の雰囲気です。家に帰ってみても、いまいち邪魔かな、とも思いますし、そうかといって、新しい職場で若者と競うというわけにもきませんし、あれこれ思案の結果、特定非営利活動法人「ジオテクチャーフォーラム」というものを造ることにしました。事業は「市民合意形成促進事業」ということにして、愛知県知事の認証を得たいであります(これを読まれた方、応援して下さい)。

そのためには、法律的知識も一般教養程度には必要とあり、いま「行政書士」試験の勉強をしようと、発意しました。試験に受かることより、試験勉強をすることに、力点を置いていきます。憲法も大昔、大学1年の教養以来ですから、なつかしいというか、やーしばらく、というべきか、それにしても改

正されてなくてよかったと言うべきか。

札幌市では、札幌駅と大通り駅(地下鉄1駅間)を結ぶ「地下歩行者通路空間」が、まもなく都市計画決定されようとしています。総幅員20メートルのうち、縁の4メートル、4メートルの合計8メートル分は、「憩いの空間」(仮称)という交通には供しなくともよい空間として、国土交通省のお墨付きを頂いた空間ができそう、というところが画期的なことであるといわれています。

この「憩いの空間」をどう活用すべきか、についての市民合意形成を、私のNPOの初仕事にしたいと、おもっています。大学の出前講座などなども含めて、このような半公共的空間(この場合は地下空間)の有効活用案の提案をしたいものです。

地下街、地下通路空間の有効活用については、先の2003.2.5(水)に、名古屋大学テクノシンポジウム「地下街新時代」を、ベンチャービジネスライブラリー3階で開催することができました(主催:日比科学技術振興財団)。退官間際の大変よいエポックとなりました。このシンポジウムを支えていただいた、地圏環境工学専攻、土木工学専攻、環境学研究科空間コースの諸先生、とわけ辻本誠先生、浅岡顕先生、林良嗣先生に厚く御礼申し上げます(このようにところに個人名をお書きして失礼しました)。

いま正直なところ、毎日が日曜日となることに、少しの不安があります。毎日なにをして、時間をすごすことができるのか、……本を読んで教養を積むとしても、果たして本来の怠け者に、そんなことができそうにもないし、……昭和40年卒業で、本当に金、土、日、が徹夜の仕事があたりますで、過ごしてきた、この年代の「趣味」のなさ、をどう、生かしていくのがよいのか、「時間」のありがたさを、ちゃんと考えて生きていくことが、できるのか、がいま、私の課題と同時に楽しみでもあります。

名古屋大学の永遠のご発展を祈念申し上げて、退官の言葉とさせていただきます。7年間ありがとうございました。

退官に際して 新しい時代の到来

松崎 雄嗣



我が国の経済・産業活動を活性化する方策として、科学技術への期待から膨大な予算が大学、国研へ投入されている。正に科学技術バブルが生じている。予算をつぎ込めば成果が上がるわけではないのは明白である。筆者もその末端のほんの一部に係わってきた。近い将来、国民の科学技術に対する失望と反動が来るのではないかと心配する。

徳川幕府の崩壊を伴う明治維新、太平洋戦争の敗戦による戦後のスタートが、近代日本国家に新しい発展と大きな飛躍をもたらすものであった。古い層による国の支配が成り立たなくなり、新しい考え方の支配者層に変わった。歴史は繰り返すと言われる。現在の我が国の財政状況は、公的債務残高がGDPの約1.5倍に達し、欧米先進諸国に比較して著しく高い。債務残高のさらなる増加が見込まれている。1月末にスイス・ダボスで開催された世界経済フォーラムで、カルロス・ゴーン氏は日本には将来のビジョンと改革プランを断固としてやり抜くトップの実行力が欠けていると指摘していた。(小学校のクラスを訪ねて授業をする、NHKのTV番組でも同氏は同じことを小学生に説いていた。)

我が国では、その時々事態に対応して近視眼的に物事が処理され、理念にそって根本的な解決を求めることが少ないと言われてきた。科学技術振興がバブルになるのも横並びで行われるからである。もっと客観的にデータを分析し、論理的に検討し、合理的に実行することが必要と言われてきている。これは、文系・理系を問わない科学的方法論である。この理系、文系の手法を実践的に活用することが問われている。さらに、若者、女性、外国人などの中に新しい考えや実行力を持つ元気のある人達、即ち、これからのリーダーを捜

すこと、あるいは科学的方法論を身に付けて育つ環境を作ることが必要と考える。

本学に於いてはこれまでも色々な試みが行われているが、科学的方法論を本当に身に付ける教育・研究を進める具体的な方法を積極的に検討・実施することを期待したい。新たに正規のカリキュラムを作る必要もなく、既に蓄積してきた理系・文系の成果を活用すれば良いのだから、外部に新たな経費を求める必要もない。若手教員・学生達の主体性を信頼して、任せることが大事である。本当に信頼し任せる環境が用意されれば、科学的方法論を身に付けた人達が本学から育ち、将来のリーダーとなっていくと信じる。NGOの活動が元気なのは、既成の考え・慣行や従来の序列に囚われないからである。

平成14年年末に、改装された建物への専攻の移転が行われた。古い研究室からの立ち退きに先立ち、研究室の卒業生の集まる会を催した。当地域の独占的な企業を退職して医学部に入り麻酔科医として再スタートした卒業生、勝ち組の企業を辞めて私大大学院の国際経営学修士に入学した者、大企業に入った後転職をした人達に話をして貰う機会を得た。既に留学して出席出来なかったが、将来国連で働くことを目指し大企業を退職して英国の大学へ入学した女性卒業生もいる。主に、ここ1,2年から数年の話である。頼もしい限りである。他の機会にも、若い人達の中に全く新しい、強い意志を感じるものが少なくない。科学的方法論を実践する新しい力が共鳴すれば、点はつながって線となり、幾つかの線は広がって面となる。新たなる時代の到来・幕開けは案外近いのかもしれない。

在職中、多くの方々のお世話になった。心からお礼申し上げて筆を置く。

定年を迎えて

宮崎 哲郎



昭和42年に名古屋大学に就職して以来35年間、自由に研究をさせて貰い、自分なりに満足する成果を出せたことに、大学に対して心から感謝いたします。名古屋大学の特色とは、研究の自由を尊重し、多様な考えを容認し、或る問題を多面的に考える点にあると思います。

大学紛争の際、一部の学生によって豊田講堂、本部、旧教養部が封鎖されました。直ちに独断的に対応することはせず、大学構成員全員の意向を踏まえてじっくりと冷静に対応した。その結果、警官隊の導入や1人の犠牲者も出さずに解決した。これは問題を多面的に考えていくという名古屋大学の特色が発揮された結果であろう。

小生が管理、運営や利用で長い間お世話になってきたコバルト60 線照射室についても同様なことがいえる。本学の 線照射室は全学の共同利用施設として、放射線の利用を多面的に考えるとの方針で約40年間運営されてきた。その結果、工、農、理、医学研究科の人が自由に使用しており、多種、多様な研究が展開され、現在でも年間の稼働率が80 - 90%に達する利用度の高い設備になっている。他の大学や研究所の多くの

線照射室が特定の部局の所属になっていたため、研究テーマが狭く、世代交代と共に利用度が減少し施設の維持が出来なくなっている。一方、本学では全学的利用を旨としてきたために、世代が変わっても様々な研究テーマが展開されている。当初は放射線の特異的性質に関する研究が主であったが、最近ではそれ以外に宇宙開発、遺伝子工学、極低温化学等の研究手段の一つとして利用されている。さらに、名古屋大学の多大なご尽力により、約6年ごとに必要となるコバルト60放射線源の補充もして頂いた。このように長期的に

研究体制を維持出来たことにより、世界的な成果も数多く生まれた。例えば、農学研究科の近藤教授は放射線に強いネズミの系統を始めて誕生させた。また、工学研究科の森教授と井口教授は光ファイバーを用いた新しい放射線測定方法を確立した。筆者等は極低温において原子の波動性によって起こるトンネル反応を最も単純・明解に実証することに成功した。他の研究機関では 線照射室を長期間維持することが出来なくなり、現在では名古屋大学の施設が東海地区最大の汎用型 線照射施設となっており、近隣の大学等の人達も利用している。

最後に、大学に対するお願いをします。地球水循環研究センターと運動場との間に広がっている林は、榊の原始林として、東山公園の1万歩コースや興正寺の森と共に昔の東山地区を示す貴重な宝ではないかと思われる。この林には10種類以上の沢山の鳥が生息しており、狸もいると推測している。10年前には、夏の夜になると乱舞していたカブト虫は、心ない多数の親子連れが林に入ってしまった、現在では残念ながら絶滅したようである。この原始林が本当に貴重なものであるか否か専門家の調査を受け、東山のキャンパス計画が自然環境を破壊せずに多面的に考えて進められることを切望致します。

40年余の研究生生活を顧みて

森田 健治



名古屋大学には、助手として赴任してから36年間お世話になり、このたび無事定年退官を迎えることになりました。お世話になりました皆様に心からお礼を申し上げます。

私は、大阪大学における院生としての5年間と名古屋大学における教官としての36年間、イオンと固体との相互作用の研究に携わってきました。大阪大学では、1962年に工学部電気工学科を卒業し、電気工学専攻の修士課程に進学する予定でしたが、講座担当の竹山説三教授の定年退官、指導教官坊秀三先生の神戸大学教授としての栄転に遭遇し、クラス担当の藤井克彦先生（阪大名誉教授）のご尽力により、一転幸運にも原子核工学専攻の修士課程に入学し、故吹田徳雄教授（初代原子力安全委員会委員長）の研究室で、秋宗秀夫先生（京大名誉教授）指導の核融合プラズマ発生の研究グループに加わりました。研究テーマとして閉じ込め磁場から逃げ出てくる中性粒子の検出器の開発が与えられ、その中性粒子の電離に、気体ではなく、固体との衝突を利用したのが、イオン・固体相互作用研究の始まりでした。研究の進展に伴い、核融合プラズマ発生への興味は薄れ、イオン・固体相互作用研究へのめり込みました。折しも、世界では1963年に高速イオン単結晶におけるチャネリング効果が発見され、イオン・固体相互作用研究が黎明期を迎えていました。博士課程修了の1967年4月に、同じ吹田研究室の助教授であった伊藤憲昭先生（名大名誉教授）にイオンチャネリングの研究をバンデ・グラフ加速器を用いて一緒にやらないかと誘われ、核融合研究から離れ、創設間もない名古屋大学工学部原子核工学科にお世話になることになりました。

名大に着任後、バンデグラフ加速器の設置に携わり、

共同利用に協力しつつ、イオンチャネリング効果を用いた格子欠陥の構造解析の研究を展開しました。1971年9月にノルエー・ガウスダルで開催された第4回固体内原子衝突の国際会議にその結果を発表しました。日本からの参加は初めてで、参加者は伊藤憲昭先生、故藤本文範先生（東大名誉教授）と筆者の3名でありました。この会議への参加が縁で、チャネリングの発見者の一人であるミュヘン大学物理学科のSizmann教授の研究室へ1972年から2年間留学する機会を得ました。2年間のミュヘン滞在における多くの第一線の研究者との交流を通して、院生時代の研究成果を客観的に評価でき、またチャネリング研究が終りに近づきつつあり、新しい展開の必要性を感じ取ることができました。1974年の帰国後、研究テーマをイオンビーム表面解析に重点を移し、院生時代の核融合研究の一環としてのプラズマ・表面相互作用の研究を開始しました。1977年に研究室が原子核工学科放射線物性工学講座から独立専攻の結晶材料工学専攻材料制御工学講座に振替えられ、1980年・1981年度に特別設備「イオンビーム表面解析装置」が設置されるに伴い、核融合炉壁材料の損耗抑制の観点の研究を展開しました。1986年に教授に昇任後、研究テーマを材料中の水素の動的挙動、半導体・金属の表面・界面構造解析へと新たに展開して36年間研究を楽しむことができました。

「人生は旅である」とよく言われます。私も多くの出会いに恵まれ、多くの転機に巡り合い、多くの恩師、先輩、同僚、後輩、学生、職員の皆様に支えられ、今日に至りました。改めて、お礼を申し上げます。最後に、2004年度の独立法人化に向けての松尾稔総長のリーダ・シップのもと着々と準備を進められている名古屋大学の益々の発展をお祈り申し上げます。

多くの人々に支えられて

武居 幸子



名古屋大学理学部の助手に昭和45年7月1日付けで採用されて以来、約32年間名古屋大学の中を転々と異動してきました。理学部に約16年間在籍した後、教授が定年のため、医療短大部に異動しました。約11年間在籍した後、保健学科への四年制化にともなって、農学部および生命農学研究科に異動して約5年目です。考えてみればいつもあなた任せの異動でしたが、あっという間の32年間でした。現在まだ、あとの実験をしなければと頭の中は一杯で、定年の実感がわいていませんが、とにかく最終講義、送別会と時間だけはどんどん過ぎていきます。3月までにかたずくかなと思いつつながらこれを書いています。

私の研究生生活の始まりは、大阪大学大学院理学研究科でした。大村恒雄先生の指導のもと肝臓ミクロソームの電子伝達系の研究：特にNADH-シトクロームb₅還元酵素の研究で博士号を授与されました。その後、1年半の阪大蛋白研奨励研究生をへて、名古屋大学理学部の助手に採用されました。阪大時代の先輩や友人、後輩はそれぞれあちこちの教授や会社の重役などになりましたが、いまでも学生気分できつあっており、実験などで困った時は相談に乗ってもらっています。

名大理学部では、カイコの電子伝達系と休眠に関して研究をおこなってきました。この間、あちこちの国際学会に参加したり、招待されたりして、女性特有の感覚かもしれませんが、昇格できなくても実験さえできればと考えて、いつのまにか16年間をすごしてしまいました。大西英爾教授の定年にともなって、ちょうどポストの空きがあった名大医療短大部に異動しました。医療短大部では4年制化を目指して書類書きに追われましたが、博士号をもっていない人達は、修得の

ために忙しい合間をぬって研究にはげんでいたようです。なぜか、このときの苦労が、教官も事務官も図書の人達も一体感をうんで今でも出会うとなつかしく感じられます。

名大医療短大部の4年制化にともなって、名大農学部および生命農学研究科に異動しました。ここでは、留学中やこれまでも合間をぬっておこなってきた腸微絨毛膜の二糖類水解酵素について：特にMaltase-isomaltaseの複合体についての研究に集中しました。ただ、5年の間にこの3月の引越しを加えると、3回目の引越しで、結構大変でした。いつも引越しばかりしているようでしたが、その合間をぬってどうにか一仕事まとめることができました。これも多くの人々の支えがあったからこそと感謝しております。

大学の法人化にともなって、これまでとは違ったいろいろな問題が、今後生じる可能性があります。皆様が一一致協力して乗り切ることと信じております。名古屋大学の益々の御発展をお祈りし、これまで、お世話になったすべての方々に感謝申し上げます。永い間ありがとうございました。

定年退官にあたって

塚 越 規 弘



このところ色々な物を引っくり返すことが多く、忘れていたことを思い出しては懐かし思い出に浸ったりして、整理するのに時間がかかって捗りません。修士論文や卒業論文の整理ではそれぞれの学生の顔などを思い浮かべたりしております。特に、4年生の卒業実験だけで研究室を離れた学生のことは余り覚えていないので、卒業論文の謝辞などを読むと、当時のことが懐かしく思い出されます。

1969年大学院を修了後、シカゴ大学そして UCLA の 2 大学でポストドクとして研究生を送りましたが、研究に関連した機器の豊富さに圧倒されたことは勿論として、紙の使用量の多さに驚されたことを今でも記憶しております。ペーパータオルなどは日本でほとんど使用されておりましたが、使い捨ての日用品が既に溢れていました。その後、1972年にはスイスのバーゼルに新しくできました Biozentrum 研究所に移り、アメリカとヨーロッパを同時代に経験できたことはかけがいのない経験となっております。また、何も考えずにやりたい研究に 6 年半も没頭できたことは私にとって大変幸せな時代でした。

私はグラム陽性、陰性菌の代表的な細菌や脂質二重膜構造を有する特殊なバクテリオファージ PM 2 を研究対象として生体膜の構造と機能について、特に脂質の面から研究してきました。アメリカでは英語に不自由しながらも、恵まれた研究環境を最大限に生かそうと若さに任せて懸命に研究しておりました。大腸菌の細胞質膜の脂肪酸組成を人工的に操作することから膜脂質の特性を解析しました。特に brominated fatty acid を細胞膜に取り込ませると膜比重が重くなり、他の脂肪酸を取り込んだ膜と分離できる membrane density label 法を確立し、その方法を利用した

membrane assembly の研究に熱中しておりました。また、バーゼルではさらに単純なウイルスの系を利用して膜構成成分の詳細なアセンブリー機構について研究することができました。Biozentrum 研究所はアメリカをはじめヨーロッパ諸国から研究者や学生が来ており、とても国際的な雰囲気でした。英語が母国語でない人が多いので、相手の意見を辛抱強く聞いたり、理解しようと努力することはアメリカにいた時と大分違っておりました。

シカゴ、ロスアンジェルス、バーゼル、名古屋と色々なテーマで研究してきましたが、研究者としての最初の部分で恵まれた国際的な環境で研究できたことはその後の研究の進め方に大きな影響を及ぼしました。名古屋大学での研究では1989年に発表した論文が Critical となり、それ以来我が国の発酵工業の基盤となった麹菌（国菌と呼ぶ人もおります）を研究対象として、糖質関連酵素遺伝子群の発現制御系について海外の研究者と共に研究を展開できたことに満足しております。

1999から2年間留学生センター長を務めました。在任中に留学生センターの永年の夢であった留学生センター棟が建設されたことは忘れられないことです。現在1000名もの留学生が本学で学んでおり、その中核的な建物ができたことは本学の国際交流の発展にも大いに貢献することと期待しております。

名古屋大学助教授の辞令を受け取ってから25年の歳月が経ちました。この間に大学院重点化が行われ、平成16年度から国立大学は独立行政法人化されますが、これを良き契機として名古屋大学が益々発展することを祈念しております。

退官に想う

牧野志雄



退官。人生にも四季があるという。人生のまとめの時期に入ったことを実感する。

私は札幌で生まれ、34歳にて名大に赴任し今に至っている。昭和20年4月、小学校に入学した。戦後民主主義教育を受けた一期生である。駐留の米兵にDTTを頭から噴霧され、家畜の飼料と思われるアメリカからの脱脂粉乳の給食で育った。

北大・理学部に入学した。「大学は義務教育ではない」という入学時の訓話を、当たり前のことと思いつつも新鮮に感じたことを記憶しているし、今もその想いは深い。新設の高分子学科を選択した。可塑剤の臭いの強烈な塩ビの風呂敷が世に出た頃である。新しい時代の到来と思った。繊維を中心とした化学産業の隆盛期であった。裏では環境汚染が生じていた。当時の恩師のお宅に「自然解」という古い額があった。不遜にも「しぜんをとく」と、当時、読み解いた。

当時受けた学生実験は、今なら教官の怠慢を指摘されるであろう程、放任であった。「自分で考える」との意であったろう。そして名大・農学部へ赴任して驚いた。至れり尽くせり、懇切丁寧な学生実験であった。両極端の教育を、受ける側と指導する側で経験した。それらの善し悪しは別である。その間、大学紛争という激動期があった。大学の建物を占拠した彼等学生に心の隅でエールを送っていたことを思う。しかし、大学は不変であった。

あれから30年近くが経過した。光陰矢のごとしである。赴任当時、スタッフ4人は理学部出身であった。全て公募方式による人事で、現在の当研究科の教官選考方式の先鞭であったことを後に知った。共通機器も多く不便なく使え、図書室などの充実した環境の下、かつ自由な雰囲気の中で門外漢であった私が農学部の

教育と研究に参画できたことを感謝している。この歳まで実に楽しく試験管を振り続けることが出来た。赴任以来、学部教育では物理化学関係の講義を担当してきたが、ここ数年、少々苦痛であった。講義の拙さはあるにしろ、自然界の事象を論理的に考えてもらえないようである。私の力不足のせいだったのか？農学部の最近の学生にとって私の講義に意味があったのだろうかとさえ思う。「生物」を高校時代に履修していない学生のこと農学部では時に話題となる。理解できる。が、問題はそれ以前にあるように思えてならない。

大学が激しく動いている。その動き・流れに対する識者の論評の多くが疑問符を投げかけていると見るのは間違いか？ここ数年、大学を取り巻くこんな字句を多く目にし、耳にする。「社会に開く」「国際化」。これは当然であろう。そうなって欲しい。一方で、「効率化」「競争力」「役に立つ」「生き残り」など。これらの論理を「私の周りの研究」に当てはめる限り全てではないにしろ納得できるし許そう。但し、根を張るものに育つか、また文化を作り出せるかは全く別である。これらの論理を「教育」「教養」に当てはめたとき、考えても考えても、答えが出てこない。実のところ今の椅子に座っていることが苦しくなってきた。

そして、大学を去ることになった。40年前の「自然解」。今、「おのずとわかる」と読み解いている。

(平成15年2月14日記)

新しい夢をもとめて

田 中 浩



若い時期に何気なく気象学の道に入り込み、気象学を習得し、気象現象を研究し、その後名古屋大学に移ってからは大学院学生を教育し修士や博士の学位を取らせることに専念してきた。多くの悔いを残しながらもそれなりに充実した生活を送ることができ、そのような場を提供してくれた名古屋大学に心から感謝し、名古屋大学あつての現在の私があると切実に思っている。

大学時代は安保闘争のさなかにあった。キャンパスは騒然としデモ隊が組織され「インターナショナル」を歌いながら国会に進んでいった。しかし、安保闘争の収束とともに私の興味は学問へと移っていった。社会主義の理想を追うよりも自分の将来を追いもとめることに必死にならざるを得ない状況にいたというべきであろう。

名古屋はまったく縁のない土地だったのだが、たまたま故小野晃先生のはからいで名古屋大学水圏科学研究所に職を得て住むようになってからすでに25年になる。名古屋はあんまり評判のいい都会ではない。歌謡曲にもまったく歌われない街でもある。しかし、永く住んでいると名古屋の良さが徐々に感じられるようになってくる。外に向かって大声で物申さず、野望や欲求が控えめで、高層ビルが少なく、市民の名古屋大学への思い入れが弱く、なんとなく落ち着ける街である。もしかしたら名古屋は環境時代の先進都市ではないかと思うようになった。

私は気象研究者だから本来ならば気象学の研究をやっていたらよい立場である。たしかにこれまで大学は象牙の塔といわれ、そこに閉じこもって社会との接触もなく一心不乱に研究をしていればよかった。先生はいい身分ですねとよくいわれた。しかし、私自身の研究人生のなかで幸福感を味わったことはほとんどな

い。苦勞して書き上げた論文が学術雑誌に印刷されたのを見た瞬間にささやかな幸福を感じるくらいである。研究しているときや文章を書いているときなどむしろ地獄の苦しみを味わうことになる。一連の研究の長いトンネルから出た一瞬だけほっとした気持ちになるが、それもすぐに消え去ってしまう。

現役生活を閉じる時期が迫ってきたいま、研究者を続けてきたことに若干のとまどいを感じることもある。論文の引用回数を調べると、かなりの自信作でも50ポイントを越えることは希であり、10ポイント以下の場合も少なくない。研究者が研究論文を発表することはもちろん価値ある行為であるが、きわめて限られた範囲の研究者にしか影響を及ぼさないのがふつうである。もっと多くの人々に影響を与える職業があったはずだと思ったりもする。

先日、中田喜直という作曲家の人生をテレビで見る機会があった。彼は「夏の思い出」という名曲をつくったことで知られている。この曲は尾瀬の夏の遠い風景を感傷的に歌った名曲で、知らない人はいないほどに有名になった。中田喜直の一周忌には、日本中の女性コーラスグループが寄り集ってこの歌を合唱し彼の人生を偲んでいたが、この情景をみながら中田喜直は幸せな人生を送った人だなと羨ましくなった。

定年後は気象学の研究を続けるつもりはない。新しい研究成果を得ることはもはや不可能だろうからである。現役のときはできなかった新しい分野、年齢とともに蓄積する雑学の知識が生かせる領域を開拓してみたいという学生時代の夢がよみがえってきた。それが何であるかをいま明かすことははばかれるが70歳を目標に一定の成果を挙げることを目標としている。いま胸の振り子が弾んでいる。

後進に明日を託して

松井 徹哉



「名古屋大学に建築学科が新しくできることになった。私は教授として招かれ、創設の任に当たることになっている。助手のポストがあるので、一緒に行かないか?。」こう言って私を名大へと誘ってくださったのは恩師京大教授の横尾義貫先生でした。当時、私は京大大学院の修士課程に在学中で、先生のご指導の下に修士論文のテーマである「シェルの極限解析」に関する研究に没頭していた。素人ながらに研究の面白さに目覚め始めていて、できれば研究職に就きたいと願っていた矢先であったので、迷わず「よろしくをお願いします」とお答えしたのが、つい昨日のことに思い出される。これが御縁となって工学部に助手として赴任したのが建築学科創設の翌年、昭和39年4月のことであり、それ以来、名大には39年間もお世話になったことになる。長年にわたり自由で闊達な学風の中で望み通りの教育と研究の仕事に携わることができ、お世話になった多くの方々への感謝の気持ちで一杯である。建築学科は、その後、大学院重点化により工学研究科建築学専攻（工学部社会環境工学科）へ、さらに環境学研究科の設置に伴い都市環境学専攻へと発展し、今春創設40周年を迎える。40年の歴史がすべて私の名大での思い出であり、感慨ひとしおのものがある。

振り返れば、昭和39年は東京オリンピックが開催され、東海道新幹線が開通し、言わば戦後復興を成し遂げた日本が高度成長時代に突入する節目の年であった。産業界とわけ建設業界は活況を呈していた。産業・経済の飛躍的発展によりその基盤整備に当たる建築家・技術者・研究者養成の需要が高まる中で、当地区の基幹大学である名古屋大学に建築学科の設置をとの地元各界の強い要望により、工学部に建築学科の設置が認められたと、当時の概算要求書に記されている。他学科の建物を借りてのスタートであったが、新任の教官陣はもちろんのこと、学生たちも名大建築学科の伝統を創るのは俺たちだとの気概に溢れてい

た。先輩の先生方の御指導を仰ぎながら、創設期の教室づくりの様々なお手伝いをさせていただいた。若輩の私にはすべてが勉強であったが、このときに学んだ多くのことがその後の大学人としての私を支える基盤となって今日に至っている。ともに酒を酌み交わし建築を談じ、野球などに興じた当時の卒業生たちは今や建築界の中核を担う存在となって活躍をされている。教育者としてこれに優る喜びはない。

さて、こうしてスタートした名大建築学科であったが、その後も大学改革の嵐に翻弄されながらも時代の変化に対応しつつ着実に成長を重ねていった。21世紀を迎えた今、建築を取り巻く状況は大きく変化してきている。大量生産・消費・廃棄型社会がもたらした地球環境危機をはじめとする20世紀の負の遺産は、人類共通の課題として、重くのしかかっている。資源消費量やCO₂排出量の約1/3を建築活動が占める状況にあって、従来のスクラップ・アンド・ビルドを踏襲することはもはや許されず、地球資源の有限性を認識したストック・アンド・リノベーションへのパラダイムの転換が不可欠である。私ども建築に携わる者に課せられた責任は重く大きい。環境学研究科の設置に際し建築学専攻が工学研究科からの全面移行の決断をしたのは、こうした時代の要請を先取りしてのものであった。環境学研究科の創設には名大への最後の御奉公のつもりで尽力をさせていただいた。新研究科の立ち上げは想像以上に大変な仕事であったが、さもないければ平穩に過ぎたであろう定年前の残余期間を緊張感と充実感と達成感を持って過ごすことができ、そして何より先多くの素晴らしい人たちと出会えたことは思いのほかの幸せであった。研究科の設立理念である新たな知の体系「環境学」の構築を目指して彼らと苦楽を共にすることができないのは唯一心残りであるが、老兵は去り行くのみ、後進に明日を託して、名大との別れを告げたい。

30年ぶりの名大で思うこと

湯田 利典



2000年3月に東京大学(宇宙線研究所)を定年退官し、同年8月から名古屋大学(太陽地球環境研究所)に在職することとなった。2年8ヶ月という短い期間であったが、私にとっては30年ぶりの名古屋での生活であり有意義なものとなった。日米安保、大学紛争など激動の60年代を滝子の教養部と疎らな建物群と土埃の舞う東山新キャンパスで過ごした。教養部から東山の物理学科に進学したとき、当時理学部長であった坂田先生が「我々はいま研究で忙しく、君たちを教育している暇はない。教育にさける時間はせいぜい2割程度である。各自勉強せよ」と言われたとき、大学とはこういうところかと妙に納得した。実際、授業は適当であり試験もほとんど無く、我々は勝手に自分で勉強をしていた。名大の物理教室は旧帝大では最も新しく、そのため個性豊かな気鋭の先生が多く、伝統にとらわれない自由で闊達な雰囲気建設途上にあった東山キャンパスに漂い、研究の熱気は学生であった我々にも直に伝わってくるようであった。この時代の物理教室が多くの研究領域を切り開き見事に開花させたことは特筆すべきことである。

70年に名古屋を離れてからは、名大へ来る機会も少なくなり集中講義と委員会等で何度か訪れた程度でキャンパスの中を散策することはなかった。現在の東山キャンパスは木々が繁り建物も所狭しと並ぶ成熟した大学の観を呈しているようである。

山の上の白い宇宙線望遠鏡ドームはマスターコースの学生のときに一年間ほど過ごした懐かしい場所であり私の宇宙線研究の原点でもある。現在は、高エネルギー宇宙線の起源と加速機構を明らかにするために標高4300mのチベット高原に世界最大の観測装置を設置して研究を続けている。中国との共同研究は今と内容は異なるが1980年に遡る。その頃の中国は至るところまだ文革の傷跡が生々しく、やっと再建の緒についたばかりであった。この荒廃から立ち上

がったのは文革前に大学教育を受けた当時40歳代の研究者たちだった。文革後の教育を受けた世代はまだ大学院生になったばかりであり、彼らはそれまでとは異質の新人類たちであった。この間に挟まれた世代は文革の嵐の真っ只中であってまともな教育を受けていない人たちである。長期に亘る教育の破壊は人材の育成に大きな歪みを残しそれは今日まで尾を引いている。幸い、双方の努力により共同研究は順調に進行して成果をあげることができ、チベットの宇宙線実験は世界に知られるものとなった。しかし、20年以上も時を経ると、共同研究を始めた頃の中国の仲間達も相次いで定年となり一線を退いていく。この共同研究の中で中国でも多くの優秀な若手研究者が育ったが、その殆どは米国など海外に流出している。加えて、最近の経済の発展により金にならない基礎科学の研究を志す若者の数は減少の途にある。後継者の問題はかなり深刻である。

日本でも物理など基礎科学は昔のように若者を引きつけないようである。理学部や物理学科など昔からの看板を書き換えた大学も多い。大学院重点化により大学院に入学してくる学生の数も大幅に増えその質も多様となっている。名大の物理教室にも高校で物理を履修しない学生が進学してくる時代であり、目的意識のハッキリしない学生の数も確実に増えている。こうした状況のなかで、一年後には名大も法人化され運営の合理化、競争原理と評価システムの導入と教育・研究の効率化などが要求されるようになる。大学はいま変革の嵐の中にあるが、理念のない拙速な改革は理想と現実の乖離をますます大きくする。未来に花開くような研究は無駄と予算を伴う長い試行錯誤の過程の中で生まれてくることが多い。名大が教育及び研究の両面で個性的でポテンシャルの高い大学になって欲しいと願っている。

出会い

小川 晃 男



ある人との出会いによって人生が大きく変わる事がある。私の場合は柴田和雄先生との出会いであった。和歌山の高校を出た私は早稲田大学の理工学部に入學し、石油化学関連のテーマを卒論に選んだ。しかし、授業にも卒論研究にも興味が持てず4年間を過したが、柴田先生の「量子力学」や「統計力学」の講義は私にとって新鮮な印象を与えた。後に知った事であるが、彼は竹内栖鳳を父とし、分光学が専門で、ノーベル賞を受賞したカルビン教授やカーネギー研究所のフレンチ教授のもとへ留学し、帰国後早大から東京工業大学教授として移られてから暫く非常勤講師として早大で教鞭をとっていた。4年生になってから、一から勉強をやり直そうと思い東工大の大学院を受験すべく同級生と柴田先生に相談に行った。その一人が今回定年を迎える宮崎哲郎君で、彼は大学院修了後すぐに名古屋大学に赴任した。私は柴田先生から、これからは生命科学が面白く、出身分野の如何に関わらず取り組めると説得され、柴田研究室を受験する事にした。彼自身、陸軍の研究所で田宮博先生に会ったのを契機に、専門の異なる生物分野に移行した経緯があり、田宮先生が所長を勤める徳川生物学研究所と東工大を兼任していた。研究室の主な研究テーマは状態識別試薬を用いてタンパクの構造を調べる研究であったが、2人の同級生がタンパクの研究を選んだ結果、私は光合成関連の研究を徳川生物学研究所で行う事になった。博士課程に進学し、光合成研究に興味を持ち始めた頃、オーストラリアで2つの光合成光化学反応系を遠心分画によって分離する事に成功したニュースが入った。そこで、電気泳動によって光化学反応系の分離を試みる事になった。古びた定電圧装置と手製の電気泳動槽を用い寒天ゲルを担体とした実験は失敗に終わった。丁度その頃シアノガムなる新しい担体売り出された事を知った。数十種の洗剤を用いシアノガム電気泳

動を行った結果、SDS(sodium dodecyl sulfate)で可溶化したホウレン草葉緑体から2つのクロロフィルタンパク複合体を分離する事に成功した。これは世界初のSDS-PAGE(polyacrylamide gel electrophoresis)となった。その後、Laemmliによって大幅な改良が加えられ、生化学研究に欠かす事の出来ない手法となった。

ラン藻(シアノバクテリア)の2つの光化学反応系クロロフィルタンパク複合体をSDS-PAGEで分離する事にも成功し、さらに、ポスドクフェローとして赴任した米国ケタリング研究所では遠心分画法による光化学反応系粒子分離に成功した。これらはラン藻の光化学反応系研究の先駆けとなった。その後、理化学研究所において気孔の研究にたずさわっていたが、この間に内外で光化学反応系の研究が飛躍的に進み、近年、ラン藻の2つの光化学反応系複合体の結晶化とX線による構造解析がなされるようになった。理研で太陽光エネルギー研究グループが発足したのをきっかけに私はラン藻の研究を再開し、形質転換ラン藻を用いてCO₂濃縮機構に関わる遺伝子の同定を始めた。1996年、かずさDNA研究所において光合成生物では初めてラン藻の全ゲノム配列が決められ、私達は遺伝子機能解析の研究グループを発足させた。翌年、「ラン藻の分子生物学」の日米セミナーがグランドキャニオンで開かれ、私が日本側代表となり名古屋大学からも多数の研究者が参加した。セミナーの熱気もさることながら月光下でキャニオンのリムを散策した事は忘れがたい。遺伝子機能解析の先はまだまだ遠いが、定年前に4つの無機炭素取込み系とそれらに関わる遺伝子を全て明らかにしたことによって私としては一つの区切りをつけたと思っている。しかし、定年は通過点であってゴールではない。私は今後場所を上海に移し研究を続ける準備を進めている。

感慨 - 名古屋大学とともに45年 -

堀川直顯



1958年、岐阜県恵那の田舎から「物の成り立ちを知りたい」との単純な動機で、坂田昌一教授の名を慕って名大に入学し、桜山の嚶鳴寮に入っていたいへんなカルチャーショックを受けた。世はまさに変革の時を迎え、若者のエネルギーがはち切れんばかりに高揚していた。名大生が「日本の将来に責任をもっているのだ」と少々自意識過剰気味ではありながら、大きな志をもって、勤評反対や日米安保条約反対等の政治課題に立ち向かう姿は私にはまばゆいばかりに映った。

1960年、学部生となって東山に移ってきた。現四谷通り交差点から望む南の方は、木造校舎が点在し、背の低い松が生えている赤茶けた丘陵地帯でウサギが走り回っていた。1人でキャンパスに立って「いよいよ本当の学問に入るのだ」との感動と緊張に包まれたことを今も思い出す。物理学教室での新3年生歓迎会は教室メンバー全員の出席で行われた。坂田、早川といった名だたる先生方が、新入りの学生に対して身近に丁寧な言葉で話されるのに接して、驚きと尊敬の念につつまれた。

1960年代半ばの「アメリカの原子力潜水艦の日本寄港」に物理研究者は「原子力の平和利用」の観点から反対を訴えたが、名大はどりわけ積極的であった。この問題は大学院生の私に、「科学者の在り方」「物理学者と原子力」といった避けて通れない問題を考えさせる機会となった。

1969年から1970年にかけて全国の大学で紛争が起こった。名大でも大学本部や豊田講堂、また教養部などが占拠・封鎖された。運悪く私は理学部職員組合の書記長に選ばれ難題に直面せざるを得なかった。紛争は収まったが、占拠された本部内の荒れ方は「改革運動」からほど遠く、60年安保時の学生の純粋さは見られなかった。私は封鎖解除の際に後頭部をゲバ棒で痛打され、その後数年にわたりむち打ち症に悩まされた。この紛争時の理学部組

合等の貢献に対し早川学部長が作ってくださった会議室は、その後30年にわたり卓球室として学部内の憩いの場となった。

「高エネルギー物理」分野は1960年代に誕生した若い分野で、私はその1期生として「権威者」のいないところで自由に育てられた。中心施設となる12GeV陽子シンクロトロン建設に当たっては、高エネルギー、原子核、宇宙線分野の研究者の協議が困難と混乱を極めた。その建設ののち数年を経て大型加速器トリスタンの建設がはじまると人員とお金の集中に対し他分野からの批判が増大した。私自身は陽子シンクロトロンでの研究を追究していたが、トリスタンの圧力はたいへんなものであった。1989年から研究をCERNの国際共同研究に移した。早川学長が締結された学術交流協定の下、1990年代は研究面で最も充実した時期となった。第2期の実験が始まり、松尾総長にも支持されまもなく成果につながる見通しである。人類の知的財産となるような大規模基礎科学では一国に偏らない国際協力の重要性をあらためて認識した。

1995年に重点化で、新設の理工科学総合研究センターに移り、工学系の先生方とおつきあいさせていただいた。ここの快適な研究条件の下で偏極核融合の基礎研究という新しい課題に挑戦した。この研究もいままさに筑波大学との共同研究として結果を出すときにきている。

学生時代から45年の長きにわたり名古屋大学で学び教えそして研究をする機会を与えられ、名古屋大学の学風の中、多くの優れた先輩・仲間に恵まれ、そして若い学生たちに接することが出来た幸せを今あらためて実感しているところです。大学を取り巻く環境が如何に変わろうとも、名古屋大学の清新の気と挑戦者魂が遺憾なく発揮され、良心と良識の府として益々発展して行くことを心から願っている次第です。

INFORMATION

本学関係の新聞記事掲載一覧（15年2月分）

	記事	月日	新聞等名
1	東海三県国公立大学の2次試験の中間出願状況 法科大学院開設を控え 法学部、早くも人気	2.1(土)	読売 他3社
2	新一年生に「学び方」教えます 教養教育を拡充	2.1(土)	朝日(朝刊)
3	こどもタイムズ：培養皮膚 自分の体から切り取り増やす 愛知県内の2社で開発中 120人ぐらいを治療した、上田実教授は発売を心待ちにしている	2.2(日)	中日(朝刊)
4	むずかしかった鉄作り 本学の「テクノロジー体験活動」で埴輪と鉄をつくりました。名古屋港西小5年 南川孝明	2.2(日)	中日(朝刊)
5	環境学研究科・森川高行教授らのグループ 総合的な循環型都市の地区開発構想を提案	2.3(月)	日刊工業
6	大学オフィス続々上京 就職活動の足場に 本学も事務所を構える予定	2.3(月)	中日(夕刊)
7	愛知県知事選について 「万博成功に政治責任」小野耕二・法学研究科教授	2.3(月)	毎日(夕刊)
8	名大サロンの主役：中西久枝・国際開発研究科教授 「イスラム世界の虚像と実像」柔軟性あるイスラム教	2.4(火)	中日(朝刊)
9	政策実現これから 今回の愛知県選挙の結果は何を投げかけるのか 小野耕二・法学研究科教授 「新しい政治、発信を」	2.4(火)	朝日(朝刊)
10	「アフガニスタン女性支援シンポジウム - 女性のエンパワーメントと家族法」と題するシンポジウム アフガニスタン女性省副大臣講演 国際開発研究科、法政国際教育協力研究センター主催	2.4(火)	中日(朝刊)
11	音波冷凍機 水谷宇一郎・工学研究科教授らが試作に成功 低コスト・簡単構造で冷熱	2.5(水)	日刊工業
12	情報科学研究科の創設委員会が初代研究科長に神谷紀生・人間情報学研究科長を選任した	2.5(水)	中日(朝刊)
13	医学部教授会が勝又義直・医学系研究科長・医学部長の後任に 杉浦康夫教授を選出 経済学研究科教授会が次期同研究科長・経済学部長に北原淳教授を再任	2.6(木)	中日(朝刊) 読売

	記事	月日	新聞等名
14	国公立大2次試験の最終出願状況	2.6(木)	読売 他4社
15	博物館特別講演会「わが国における自然史教育・研究の課題」 講師は森啓・東北大名誉教授	2.6(木)	中日(朝刊)
16	ペーパーナイフ：「市民」とは 「現状を良くしようと市政に物言う人は市民。大多数は今の暮らしを大切にすする住民」堀内守名誉教授	2.6(木)	中日(朝刊)
17	みんなの本：「疑似科学と科学の哲学」 健全に疑う技術説く 伊勢田哲治・情報文化学部助教授 著	2.6(木)	中日(朝刊)
18	矢作川流域全体で保全を 豊田でシンポ 辻本哲郎・工学研究科教授が「地域の川・流域の川」と題して基調講演	2.6(木)	中日(朝刊)
19	遺伝子がすべて？：遺伝子型分かれば治療や予防も 浜島信之・医学系研究科予防医学教授	2.7(金)	中日(朝刊)
20	大幸財団の丹羽奨励生 14件に4500万円助成 後藤賢二・陸上など	2.7(金)	中日(朝刊)
21	医学部・工学部連携で医療技術向上 大学、相次ぎ横断組織 主な例：遺伝子・再生医療センターを附属病院に	2.7(金)	日経(朝刊)
22	インフルエンザ脳症 今冬、子供が30人以上死亡したことが医学部の森島恒教授らの調査で分かった	2.8(土)	読売 朝日(夕刊)
23	廃材を活用し、からくり人形 木方洋二名誉教授と科学技術交流財団などの研究グループが開発	2.8(土)	日経(朝刊)
24	役所ミス小中学校通えず 女兒無戸籍を理由に仮入学もできず 「教育を受ける権利を保障する行政の義務を怠った」中嶋哲郎・教育発達科学研究科教授	2.8(土)	中日(朝刊)
25	名古屋弁護士会が新会長に法学部卒業の田中清隆氏を選出	2.8(土)	中日(朝刊)
26	「暗黒星雲」鮮やかに 理学研究科光赤外線天文学研究室と国立天文台の研究チームが「近赤外線」を使い撮影	2.8(土)	毎日(夕刊) 他3社
27	本学脳外科セミナー「脳を見る - 脳画像と脳卒中医療の最前線」 最先端の医療を解説 脳神経外科・吉田純教授らが講演	2.9(日)	中日(朝刊)

	記事	月日	新聞等名
28	中日文化センターだより：シルクロード学講演会「観音の道 - インドから日本へ」 宮治昭名誉教授ら二人が講演	2 .9(日)	中日(朝刊)
29	愛知医科大は理事会で次期学長に元本学学長の加藤延夫氏を再任した	2 .11(火)	毎日(朝刊)
30	栄西自筆の書状14点 大須観音で見つかる 稲葉伸道・文学研究科教授らの研究グループが発見 「栄西時代の様子を知るうえで重要ではないか」	2 .12(水) 2 .13(木)	中日(朝刊) 他2社
31	金子安之名誉教授 急性心不全で死去	2 .13(木)	読売
32	みんなの本：「日本近世・近代の畑作地域史研究」畑作村民の生活復元 溝口常俊・環境学研究科教授	2 .13(木)	中日(朝刊)
33	サッカーボール型分子の中に入った金属を見る 多様な特性を解析 薬剤・医薬へ応用しらむ 高田昌樹・工学研究科助教授	2 .13(木)	日刊工業
34	子育て学生応援します 大学にも保育施設続々 本学も「法人化したときの売りになる」(伊藤正之副総長)と検討を進める	2 .13(木)	朝日(朝刊)
35	研究成果、社会で生かせ NPO にかける大学教授 「提言やイベントも視野」福田敏男・工学研究科教授	2 .13(木)	日経(夕刊)
36	名古屋国際フォーラム ノーベル化学賞受賞者 未来への伝言 野依良治教授ら3名 豊田講堂で	2 .14(金)	朝日(朝刊)
37	大学改革の行方を探るシンポジウム 「どう見る大学改革 - 国立大学は消えるの？」で伊藤正之・副学長らが話し合う	2 .14(金)	中日(朝刊)
38	科学を読む：コスト削減圧力の果てに「コロンビア」帰還事故 池内了・理学研究科教授	2 .14(金)	朝日(朝刊)
39	茶どころ名古屋後継者難 大名茶道伝える「秘伝書」 山寺秀雄名誉教授所蔵	2 .15(土) 2 .18(火)	中日(夕刊) 中日(朝刊)
40	高度な数学講義 高校生が成果発表 多元数理科学研究科公開講座「数学アゴラ」の修了式	2 .16(日)	中日(朝刊)
41	大河内記念賞 酒井朗・工学研究科助教授など	2 .17(月)	日刊工業
42	平安末期の猿投案 本学・東山で発掘 陶器捨て場破片が3トン	2 .18(火)	読売
43	研究室発：木内哲也・医学部 移植という医療を身近に	2 .18(火)	中日(朝刊)
44	苦痛少ないがんの温熱療法 「電子レンジと同様の原理応用」小林猛・工学研究科教授	2 .18(火)	日刊工業

	記事	月日	新聞等名
45	サロン：名古屋で高齢者排尿障害シンポ 官民学連携“愛知方式”に注目 テーマは「みんなで考えよう、お年寄りの尿もれ対策」大島伸一・医学系研究科教授	2 .18(火)	読売
46	金融シンポ 国際経済動態研究センターが「キタン国際学術シンポジウム 日本と地域の経済と金融」を開催	2 .18(火)	中日(朝刊)
47	医局制度、変わるか 教授の人事権は残る 本学医学部も4月から、ナンバー制内科の医局を廃止する	2 .18(火)	朝日(朝刊)
48	この人に聞く：家森信善・経済学助教授 経済再生へ政策提言 高等研究院がスタート	2 .19(水)	読売
49	部局長5人を選出 森滋勝・先端技術共同研究センター長 山木昭平・生物機能開発利用研究センター長 浅井滋生・難処理人工物研究センター長 末松良一・留学生センター長 河出清・環境量子リサイクル研究センター長	2 .19(水)	中日(朝刊)
50	叙位叙勲 従四位勲三等瑞宝章 桐谷道雄名誉教授	2 .19(水)	読売 中日(朝刊)
51	留学生と交流 国際意識高める 工学研究科のパンマワ・ゴンケオさん子どもたちの生活紹介	2 .19(水)	中日(朝刊)
52	テロ・放火想定外 日本も「人ごとではない」「改めてテロ的な行為に備える対策必要」辻本誠・環境学研究科教授	2 .19(水)	朝日(朝刊)
53	教育改革の歩み書籍に 犬山市教委 中嶋哲彦・教育発達科学研究科教授らが執筆する	2 .20(木)	中日(朝刊)
54	愛知の人材ラオスでキラリ 国際開発研究科で学んだ木下淳子さんが活躍	2 .20(木)	中日(朝刊)
55	春闘 法学部卒の柴田昌治・中部経営者協会会長に聞く「定昇見直しは当然」	2 .21(金)	中日(朝刊)
56	遺伝子がすべて？：個人情報 社会の正しい理解が重要 浜島信之・医学系研究科教授	2 .21(金)	中日(朝刊)
57	ひととき：NPOと地域住民組織 連携強化で活動も発展 コミュニティ政策学会主催のシンポジウム 本学で開催	2 .21(金)	中日(朝刊)
58	コーナーキック：就職するという こと 金井篤子・教育発達科学研究科助教授	2 .21(金)	中日(夕刊)
59	三河湾 アサリの大量死 貧酸素水の塊 「修復、評価できる」西條八東名誉教授	2 .21(金)	中日(夕刊)
60	医工連携へ大学動く 本学・名工大 研究者が横断組織	2 .22(土)	日経(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
61	知的クラスター創生事業 文部科学省は富山・高岡、名古屋、徳島を追加選定 名古屋市は本学などが参加する	2 22(土) 2 24(月)	日刊工業 他 2 社
62	災害現場で UFO 活躍? 名大などのグループ 円盤形の無人飛行機を開発	2 22(土)	中日(夕刊)
63	法人化控え「横並び、生き残れない」本学、独自入試06年度から改革	2 23(日)	朝日(朝刊)
64	文学研究科の研究会で22日に発見された宋西の書状展示	2 23(日)	中日(朝刊)
65	埼玉県志木市教育委員会が発足された「志木教育政策研究会」 犬山教育委員会の中嶋哲彦・教育発達科学研究科教授らが参加	2 23(日)	中日(朝刊) 日経(朝刊)
66	名古屋を育てた堀川は産業遺産シンポジウム「日本の技術史をみる眼 -名古屋を育てた堀川」 近藤哲生名誉教授らが講演	2 23(日)	中日(朝刊)
67	02年度科学技術振興会助成金 三浦佳子・工学研究科助手らに	2 24(土)	日刊工業
68	柏木千秋名誉教授 老衰のため死去	2 24(土)	中日(夕刊)
69	中部地区幹部行政官セミナー 「『知の時代』にむけて」と題して 野依良治教授が講演	2 25(日)	中日(朝刊)
70	「廃棄物学会東海・北陸支部」の設立総会 常議員伊藤秀章・理工科学総合研究センター教授など37人が選出された	2 25(日)	中日(朝刊)
71	Q ももに痛み、骨粗しょう症か A たぶん神経痛、心配なし 石黒直樹・医学部教授 Q 大腸憩室、放置可能ですか A 自覚症状なければ治療不要 後藤秀美・医学部教授	2 25(日)	読売

	記 事	月 日	新聞等名
72	第11回万博専門部会 「いま一度、万博の理念を問う」をテーマに堀内守名誉教授ら 6 人の委員が議論	2 25(日)	中日(朝刊)
73	タイの子どもにそろばん贈って 元本学留学生の小学教師呼びかけ	2 25(日)	朝日(朝刊)
74	国立大法人化1300人反対署名 「大学改革を考えるアピールの会」(呼び掛け人代表・池内了・医学系研究科教授)	2 25(日)	中日(朝刊)
75	国公立大学 2 次試験始まる 志願者56万6419人 初日欠席は5.4% 本学志望者は3442人、3.1倍	2 25(日) 2 26(月)	中日(朝刊) 他 4 社
76	「痛み学」全国初の研究講座 熊沢孝朗名誉教授が愛知医科大でスタート	2 26(月)	中日(朝刊)
77	国立大学 2 次試験 本学地理では、各国の通信事情を分析させた	2 26(月)	毎日(朝刊)
78	直言：「シャトル事故」で地球を知る 上出洋介・太陽地球環境学研究所長	2 26(月)	朝日(朝刊)
79	知的クラスター名古屋が実施地域に ナノテク利用のものづくり拠点 本学などが中核研究機関となる	2 26(月)	中日(朝刊)
80	老年学：健やかに「冬」を迎える 井口昭久・医学系研究科教授	2 27(火)	朝日(朝刊)
81	子どもの関心引き寄せ心の豊かさはぐくむ 第11回愛知万博専門部会 「共同体の意見問う」堀内守名誉教授	2 28(水)	中日(朝刊)
82	エイズ防御に光明 猿の有力ワクチン開発 永井美之名誉教授・富山県衛生研究所長「人への臨床試験視野に」	1 .1(水)	北陸中日

本誌に関するご意見・ご要望・記事の掲載などは企画広報室にお寄せください。

総務部 企画広報室 企画広報掛

電話：052(789)2016

FAX：052(789)2019

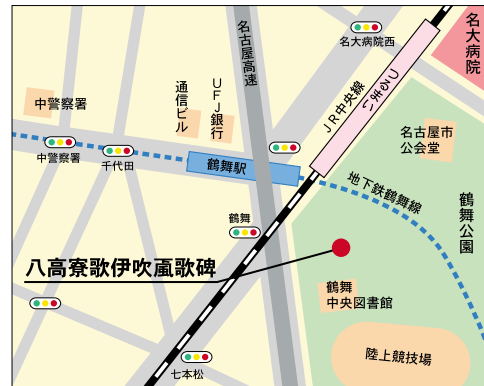
E-mail：kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

「伊吹おろし」は、名古屋大学の包括校（旧教養部の前身校）にあたる第八高等学校（八高）の寮歌で、1916年に作られました。八高寮歌は「伊吹おろし」以外にも数多くあり、「伊吹おろし」が作られる前でもすでに5曲ありました。この年はじめて八高の寮歌集を作成することとなり、新たな寮歌を寮内だけではなく校内へも掲示公募して採用された3曲の一つが「伊吹おろし」です。「伊吹おろし」が八高寮歌の代表歌となったのは、この寮歌集が刊行され、広く一般に流布したことと関係あるのではないかと思います。作詞は中山久氏、作曲は三橋要次郎氏（八高第8回卒業）で、全国の寮歌の中でももっとも優美で、ロマンチックな寮歌といわれているそうです。八高生にかぎらず、当時名古屋の中学生や女高生にも歌われていました。現在の名古屋大学でも、体育会を中心に歌いつがれています。

歌碑は、1958年に八高創立五十周年を記念し、鶴舞公園内の鶴舞図書館前に建設されました。鶴舞公園が選ばれたのは、旧市街から八高へ行く途中にあって八高生が通学の際必ずここを通過していったからです。

歌碑の敷石は岡山県北木島産の白御影石、台座石は福島県浮金村産の黒御影石（浮金石）、碑面は岡山県万成山産の紅御影石（万成石）という、赤白黒の三色を調和させてすっきりつくられています。これは八高の清潔な校風を示しているといわれています。また碑には楽譜が刻まれており、これは曲碑といって当時としては極めて少ない珍しい碑でしたが、永く青少年に歌いつがれることを願って、このような歌碑にしたそうです。

碑の設計は浜田稔氏（当時東京大学教授、八高第12回卒業）が、建設事務はおもに浜島敏雄氏（当時愛知県建築部長、八高第20回卒業）が担当しました。なお碑陰には6月1日と刻まれています。これは五十周年記念祭が行われた日であり、実際の除幕式は9月に行われています。



名古屋大学の歴史に関する記念碑・記念物に関する情報をお持ちでしたら、
大学史資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡下さい。